

金沢市・野々市市  
下新庄フルナワシロ遺跡

2016

石川県教育委員会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

しもしんじょう  
下新庄フルナワシロ遺跡

2016

石川県教育委員会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 例　　言

- 1 本遺跡は下新庄フルナワシロ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県金沢市四十万町、野々市市新庄3丁目地内である。
- 3 調査原因是二級河川高橋川 広域河川改修事業であり、同事業を所管する石川県土木部河川課(安原・高橋川工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財團法人石川県埋蔵文化財センター(平成25年度より公益財團法人石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会から委託を受けて、平成24(2012)年度から平成27(2015)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。  
調査に係る費用は石川県土木部河川課(安原・高橋川工事事務所)が負担した。
- 5 現地調査は平成24(2012)年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時は下記のとおりである。

【第1次調査】

期　間 平成24年4月25日～同年5月30日

面　積 360m<sup>2</sup>

担当課 調査部特定事業調査グループ

担当者 岩瀬由美(専門員)、矢部史朗(嘱託調査員)

【第2次調査】

期　間 平成24年9月3日～同年10月18日

面　積 750m<sup>2</sup>

担当課 調査部特定事業調査グループ

担当者 和田龍介(専門員)、中泉絵美子(嘱託調査員)

- 6 出土品整理は平成25年度に調査部特定事業調査グループが担当した。
- 7 報告書の執筆は平成26年度、刊行は平成27年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆・編集は岩瀬(調査部特定事業調査グループ専門員)が行った。
- 8 調査には下記の機関・個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。  
石川県土木部河川課(安原・高橋川工事事務所)、金沢市教育委員会、(株)豊蔵組、野々市市教育委員会、田村昌宏、出越茂和、森 公章
- 9 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系に準拠した。
  - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
  - (3)遺物報告番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、観察表には報告番号や出土遺構、器種、調整等の遺物観察事項のはか、出土品整理時の図化番号を記載した。
  - (4)遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。  
S B : 挖立柱建物、S A : 構列・柱列、S I : 竪穴建物、S K : 土坑、S D : 溝、P : 柱穴・小穴、S X : その他(不明確遺構等)

## 目 次

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査の原因と調査に至る経緯 .....	1
第2節 現地調査の経過 .....	1
第3節 出土品整理、報告書作成・刊行の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 調査の成果 .....	7
第1節 調査の概要 .....	7
第2節 1区の遺構と遺物 .....	18
第3節 2区の遺構と遺物 .....	23
第4節 3区の遺構と遺物 .....	24
第4章 総括 .....	47
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

- 第1図 調査区位置図 (S=1/1,000)  
第2図 遺跡の位置  
第3図 周辺の遺跡地図 (S=25,000)  
第4図 グリッド配置図 (S=1/500)  
第5図 1区遺構配置図1 (S=1/100)  
第6図 1区遺構配置図2 (S=1/100)  
第7図 1区基本土層図 (S=1/60)  
第8図 2区遺構配置図1 (S=1/100)  
第9図 2区遺構配置図2 (S=1/100)  
第10図 2区基本土層図1 (S=1/60)  
第11図 2区基本土層図2 (S=1/60)  
第12図 3区遺構配置図 (S=1/100)  
第13図 3区基本土層図 (S=1/60)  
第14図 1区遺構図1 (SD S=1/60, SB S=1/80)  
第15図 1区遺構図2 (SA、ピット S=1/30 ·  
1/60 · 1/80)  
第16図 1区遺構図3 (ピット S=1/30 · 1/60)  
第17図 1区遺構図4 (SI1 S=1/60)  
第18図 1区遺構図5 (SI2 · 3 S=1/60)  
第19図 1区遺構図6 (SI2 · 3 S=1/60)  
第20図 1区遺構図7 (SI4 S=1/60)  
第21図 1区遺構図8 (SK S=1/60)  
第22図 2区遺構図1 (ピット S=1/60)  
第23図 2区遺構図2 (ピット · SI · SK S=1/60)  
第24図 2区遺構図3、3区遺構図 (SK ほか S=1/60)  
第25図 1区遺物図1 (S=1/3)  
第26図 1区遺物図2 (S=1/3)  
第27図 1区遺物図3 (S=1/3)  
第28図 1区遺物図4 (S=1/3)  
第29図 1区遺物図5 (S=1/3)  
第30図 1区遺物図6、2区遺物図1 (S=1/3)  
第31図 2区遺物図2、3区遺物図 (S=1/3)  
第32図 遺構変遷図 (S=1/1,000)

## 表目次

第1表 土器観察表

第2表 石・金属製品観察表

## 図版目次

- 図版1 (1区遺構1)  
遠景 (南から)、俯瞰  
図版2 (1区遺構2)  
完掘状況 (北から)、完掘状況 (南から)  
図版3 (1区遺構3)  
SI2-3 完掘状況 (北東から)、調査前風景 (北西から)、  
表土除去作業 (北から)、表土除去状況 (南から)、  
遺構検出作業 (南から)  
図版4 (1区遺構4)  
SI1 検出状況 (北西から)、3、4区遺構検出状況  
(南から)、2、3区遺構検出状況 (北から)、1区  
南壁土層断面 (北から)、P97 挖削作業 (北東から)、  
P97 遺物出土状況 (南から)、P97 完掘状況 (南から)、  
P5 土層断面 (北から)  
図版5 (1区遺構5)  
P8 (土器群7) 遺物出土状況 (北から)、P11 (土器  
群11) 遺物出土状況 (北から)、P11 土層断面 (南

から)、P12 遺物出土状況 (南から)、P12 線刻土器  
出土状況 (北から)、P13 (土器群12下層) 遺物出  
土状況 (南から)、P13 遺物出土状況 (南から)、P17 (土  
器群1上層) 遺物出土状況 (西から)  
図版6 (1区遺構6)  
P17 (土器群1下層) 遺物出土状況 (東から)、P23 (土  
器群13) 遺物出土状況 (南から)、P26 (土器群10)  
遺物出土状況 (南から)、P25 遺物出土状況 (南から)、  
P27 遺物出土状況 (南西から)、P81 遺物出土状況 (南  
から)、P82 遺物出土状況 (東から)、SI1 完掘状況 (西  
から)  
図版7 (1区遺構7)  
SI2 カマド南北土層断面 (東から)、SI3 西壁土層  
断面 (東から)、SI3 床面検出状況 (南から)、SI2 ·  
3-SK1 土層断面 (北から)、SI2 · 3-P9 土層断面 (北  
東から)、SI3 挖方土層断面 (東から)、SI4 南北土  
層断面 (南西から)、SI4 床面検出状況 (南から)

図版8 (1区遺構8)

SI4 カマド検出状況（東から）、SI4 挖方南北土層断面（西から）、SI4 床面検出ピット完掘状況（南から）、SK1 完掘状況（東から）、SK2 遺物出土状況（東から）、SK2 完掘状況（東から）、SD1～3 完掘状況（南から）、土器群8最下層遺物出土状況

図版9 (2区遺構1)

遠景（北から）、俯瞰

図版10 (2区遺構2)

表土除去状況（南から）、遺構検出作業（南から）、遺構検出状況（北から）、西壁②土層断面（北東から）、西壁③土層断面（東から）、トレンチ1（北から）、トレンチ4（南東から）、P4土層断面（東から）

図版11 (2区遺構3)

P9 土層断面（北東から）、P11 土層断面（西から）、

P12 土層断面（西から）、P19 土層断面（北から）、SII 遺物出土状況（北東から）、SII 土層断面（北東から）、SII 完掘状況（南西から）、SK2 土層断面（北から）

図版12 (3区遺構1)

遠景（北から）、俯瞰

図版13 (3区遺構2)

調査前風景（北から）、遺構検出状況（北から）、西壁②土層断面（東から）、西壁④土層断面（東から）、P2 土層断面（北から）、P5 土層断面（北から）、P7 土層断面（北から）、SX1 土層断面（北東から）

図版14 (遺物1)

図版15 (遺物2)

図版16 (遺物3)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査の原因と調査に至る経緯

下新庄フルナワシロ遺跡の発掘調査は、二級河川高橋川 広域河川改修事業に伴い、石川県教育委員会(以下、県教委)及び(財)石川県埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)により実施されたものである。

二級河川高橋川 広域河川改修事業は昭和49年(1974)の高橋川氾濫による甚大な浸水被害を契機として昭和53年度から本格的に開始された事業である。本遺跡にかかる工事は右岸については護岸工事、及び河道堰、堰の操舵室、分水路の築造工事、左岸については護岸工事と市道付け替え工事であり、平成24年度に事業が予定されていた。事業用地が周知の埋蔵文化財包蔵地である下新庄フルナワシロ遺跡に近接することから、事業の実施にあたっては事前の分布調査が必要である旨、平成24年2月20日付けで石川県教育委員会文化財課(以下、文化財課)から安原・高橋川工事事務所(以下、安高事務所)宛に通知してあったが、文化財課への照会を経ないまま平成23年度に工事に着手し、文化財課がその情報を得て平成24年3月6日に現地確認に赴いた時には、すでに遺跡の一部が損壊を受けており、安高事務所に工事の中断を要請した。その後、同年3月9日付けで分布調査依頼を受け、3月12日に工事が施工された箇所の現地踏査を行って、埋蔵文化財が損壊された範囲と保護措置が必要な範囲を確認し、3月22日付けでその旨回答した。損壊を受けたのは野々市市新庄3丁目に当たる左岸側で、護岸工事、及び仮設河道の掘削による。掘削を免れた壁面観察で遺構を確認できたが、上流側についてはすでにモルタル拭き付け工事が実施済みであり、下流側に關しても壁面保護のために調査着手まではモルタル拭き付けで対応することとなった。

分布調査未了部分についてはその後、3月27日に金沢市四十万町に当たる右岸、4月17日に左岸の事業用地について重機掘削による分布調査を行い、左右両岸の調査必要範囲を確定した。右岸の工事も発注済みすでに着手されていたことから、工事を中断しての調査となるため早期の実施が必要となり、文化財課と埋文センターが協議を行い、4月に着手、5月に完了することで対応した。また、左岸については工事の工程から8月以降に調査が可能となる見込みであったことから、9月に着手することとなった。

事業者から平成24年3月27日付けで文化財保護法第94条に基づく発掘通知が県教委宛に提出され、それに対し県教委は同日付けで発掘調査が必要である旨事業者宛に通知した。県教委から右岸側の発掘調査の委託を受けた埋文センターは、平成24年4月9日付けで県教委宛に発掘調査届を提出し、同日付けで県教委から通知を受けた。後に左岸側に關しても調査が必要となったため県教委と委託の変更契約を交わし、第2次調査となる左岸に關しての発掘調査届は同年7月31日付けで県教委宛に提出し、同年8月1日付けで県教委から通知を受け、調査が実施された。

## 第2節 現地調査の経過

第1次調査(1区)は高橋川右岸である金沢市側の発掘調査を平成24年4月～5月に行った。調査に先立つ4月12日に文化財課、安高事務所、工事施行者の豊蔵組、埋文センターが現地にて調査方法、

排土置き場等について確認し、表土掘削の開始以降は調査が完了するまで一切の工事を中断すること、調査は5月末には終了することなどを申し合わせた。重機による表土掘削は4月25日から27日にかけて行い、5月1日から作業員を投入した。調査区東壁は公園敷地であったために排水性のよい盛土砂の下層に暗渠配水管が高橋川、つまりは調査区に向かって何本も延びていたため、雨水による壁面の崩落防止目的の養生から着手し、その後に遺構検出を行った。遺構検出の結果、北半部には堅穴建物等の大型遺構を、南半部には掘立柱建物を構成するとみられるピット群を確認した。中央部付近では包含層中に多数の土器を認め、まとまりごとに土器群として取り上げを行った。また、北端部付近では古代の包含層上面から掘り込む遺構を確認し、調査、図化後に掘り下げを行った。遺構密度が高く、出土遺物も多かったため作業には手間取ったが、5月24日にはラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、堅穴建物床面掘り下げなどの作業を進めていたところ、掘り残していたピットからほぼ完形の土師器碗が5枚出土した。5月30日午前には器材を撤収したが、同日夕方まで図面作成作業に追われ、同日をもって安高事務所に現地を引き渡した。

第2次調査は左岸の野々市市側の発掘調査を9月～10月に実施した。調査に先立つ8月10日に文化財課、安高事務所、工事施行者の日農技研・河内組、埋文センターが現地打ち合わせを行い、工事の工程上、調査は下流側(2区)から行うことで合意し、構造物の撤去、排土置き場、調査区にかかる道路の通行止めの日程などについても協議した。上流側(3区)の仮設河道の護岸モルタルの撤去は、遺構面に近い掘削が生じるものについて、埋文センター職員の立会いの下、8月22日に行われた。9月3日から7日にかけて2区の表土掘削を行い、10日から作業員を投入、12日から遺構検出作業を開始した。遺構は西側を中心としてピットや溝などを検出したが、東側は高橋川の旧流路とみられる河川跡が検出されたのみで、トレンチ調査で土層堆積状況等を確認した。出土遺物などは1区に比べて少なく、9月26日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。続いて10月2、3日に3区の表土掘削を実施し、4日から遺構検出を行った。3区はピットが散発的に見られる程度であったため進捗がよく、11日にはラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施し、15日に器材の撤収を行って全ての作業を終了した。なお、8日には地元新庄3丁目町会からの要望による現地説明会を開催し、40名の参加を得た。

### 第3節 出土品整理、報告書作成・刊行の経過

出土品整理作業は平成24年度に洗浄作業を、平成25年度に記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースの各作業を実施した。作業は発掘作業同様県埋文センターに委託され、調査部特定事業調査グループが担当した。

報告書刊行については、平成26年度に調査部特定事業調査グループが担当して原稿作成等を行い、平成27年度に報告書を刊行した。

## ○調査体制（平成 24 年度）

調査期間	平成 24 年 4 月 9 日～平成 25 年 3 月 31 日（契約期間）
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 木下公司）
総括	岡田義彦（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長）
秘書・経理	山口 登（秘書グループリーダー）
三浦純夫（所長）	
調査	福島正実（調査部長） 浜崎信司（特定事業調査グループリーダー）
岩瀬由美（特定事業調査グループ専門員）	
和田龍介（特定事業調査グループ専門員）	
担当	矢部史朗（国関係事業調査グループ嘱託調査員） 中泉絵美子（特定事業調査グループ嘱託調査員）

## ○整理体制（平成 25 年度）

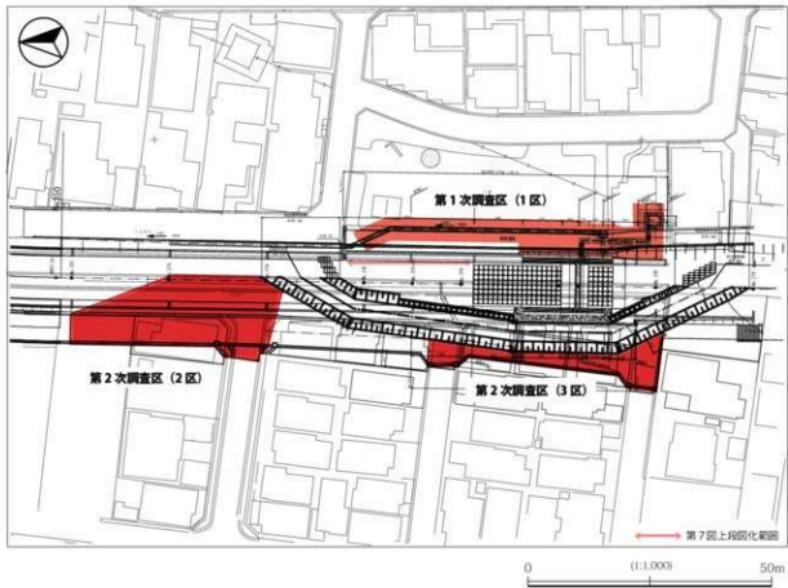
期間	平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日（契約期間）
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 木下公司）
総括	橋本定則（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長）
秘書・経理	山口 登（秘書グループリーダー）
福島正実（所長）	
整理	藤田邦雄（調査部長） 土屋宣雄（特定事業調査グループリーダー）
担当	特定事業調査グループ

## ○整理体制（平成 26 年度）

期間	平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日（契約期間）
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 木下公司）
総括	（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長）
秘書・経理	山口 登（秘書グループリーダー）
福島正実（所長）	
整理	藤田邦雄（調査部長） 川畠 誠（特定事業調査グループリーダー）
担当	特定事業調査グループ

## ○整理体制（平成 27 年度）

期間	平成 27 年 4 月 9 日～平成 28 年 3 月 31 日（契約期間）
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 木下公司）
総括	柴田政秋（専務理事）
事務	釜親利雄（事務局長）
秘書・経理	長崎 誠（秘書グループリーダー）
福島正実（所長）	
整理	藤田邦雄（調査部長） 川畠 誠（特定事業調査グループリーダー）
担当	特定事業調査グループ



第1図 調査区位置図(S=1/1,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

下新庄フルナワシロ遺跡は金沢市四十万町と野々市市新庄3丁目に所在する。金沢市の南西部、及び野々市市の南端部付近に当たる。石川・福井・岐阜三県の県境に聳える雲峰白山に源を発する一級河川手取川は、県下最大の河川であり、流路を7回変えながら現在地へ南遷したと言われる累れ川でもある。その豊富な水量と共に流れ出る土砂は、白山市鶴来地区を扇頂として東方の富樫山地と南方の能美丘陵の間に広がる半径12kmに及ぶ広大な扇状地を形成する。7度の流路跡は手取川七ヶ用水として利用されており、七ヶ用水から派生した中小河川が手取川扇状地を無数に貫流し、その河川に沿って島状地形と言われる微高地が点在する。耕地整理や区画整理が進んだ現代においてはその景観は失われつつあるが、集落遺跡や古くから続く現集落の多くは地盤の安定したこの微高地に占地している。

本遺跡は手取川扇状地扇央部の東端近くに立地しており、七ヶ用水の最東部を流れる富樫用水系の中でも最も東の富樫山地の裾野を流れる高橋川右左岸に跨っている。高橋川は手取川からの流水に富樫山地から流れ出る小河川を包括しながら下流域で伏見川と合流する。遺構確認面の標高は、南端付近で41.6m、北端付近で41.1mを測り、南から北へ向かって緩やかに傾斜している。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡は金沢市と野々市市の境界域に位置し、第3図に示した周辺の遺跡地図には富樫山地、及びその麓に立地する遺跡も多く含まれるが、本遺跡が手取川扇状地扇央部の東端部に立地することから、主に扇状地に展開する遺跡の動向を概観することとする。

縄文時代には手取川は扇状地の扇央稜線、現在の鶴来町本町から松任市徳光町を結ぶライン付近を流れていたと推定されており、ライン南側に比べて地盤の比較的安定していた北東側の中でも、地下水の自噴地帯である扇端部に当期の遺跡は多く展開している。扇状地から外れる富樫山地麓の額谷カネカヤブ遺跡(63)で中期中葉頃の堅穴建物1棟が検出されている他、扇央部に位置する下新庄アラチ遺跡(3)、上林新庄遺跡(4)、粟田遺跡(10)などでも後晩期の遺物が出土している。詳細な生活様相は不明であるが、粟田遺跡では打製石斧の素材採取場所が確認されており、生業の一端を垣間見ることはできる。また、平成26・27年度に調査された新庄カキノキダ遺跡(8)で後期の土器や晩期の可能性のある堅穴建物が1棟確認されたことから、扇央部でも今後居住地が発見される可能性が高い。

弥生時代になっても、地下水位が低く疊混じりの土壤が広がる扇央部は生産性が高くないためか、扇端部のような大規模集落の展開は確認されない。粟田遺跡で遠賀川式の系譜を持つ土器が1点確認され、



第2図 遺跡の位置

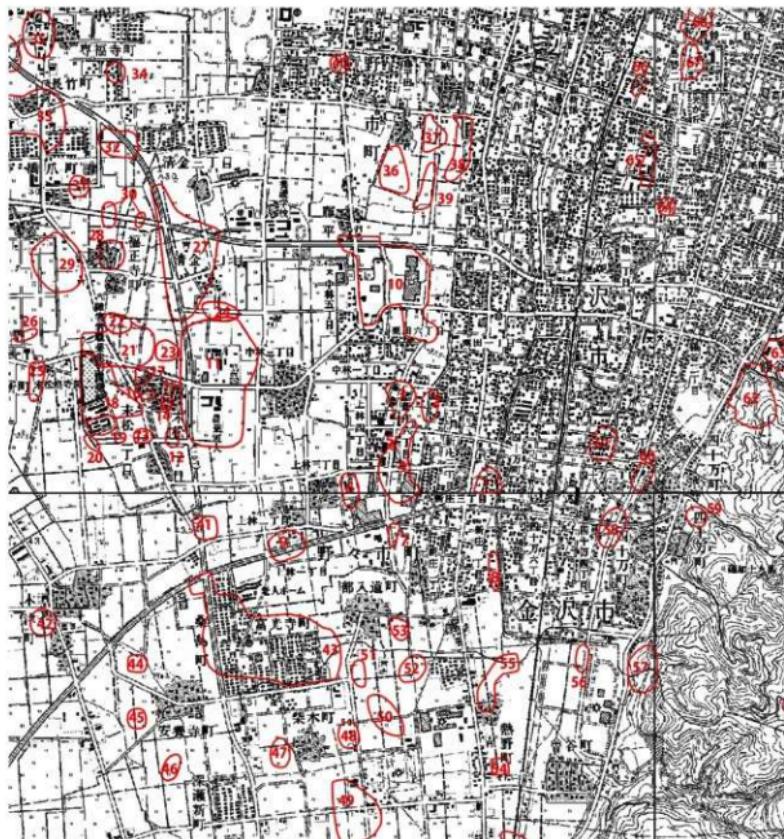
上林遺跡(9)で前期の遺物が確認されていることから弥生文化がこの地にも波及してきた痕跡は認められるものの、空間的、時間的な広がりは見られない。やや下流域に位置する大額キヨウアン遺跡(64)や山麓部の額谷ドウシンドア遺跡などで後期から終末期の集落が確認されるが、扇央部でも南よりの地では木津遺跡(41)や上新庄ニシウラ遺跡(7)で弥生時代末～古墳時代初頭の集落が確認されるまで、定住の確たる痕跡は認められない。それらであっても存続期間は極めて短く、木津遺跡で確認された数度の洪水痕跡など、扇央部でも山側に位置するこの地域は未だ開発には困難を伴う地域であったと言える。

統く古墳時代にもその状況に変化はないが、7世紀以降、開発の中心はこれまでの扇端部から扇中央部に移っていく。周辺域では7世紀前半頃に比定されている上林古墳(5)やほぼ同時期と推定される末松古墳(15)などの終末期古墳の点在が確認されており、この頃に始まるこの地の開発に先鞭を付けた開発領主層の墓と位置付けられている。末松古墳周辺では野々市市末松から同清金にかけて遺跡が密集し、末松遺跡群と総称されるが、その中で末松ダイカク遺跡(21)、末松福正寺遺跡(22)で7世紀初頭～前半の遺物が確認されており、当期から集落が形成され始めたことが分かっている。7世紀後半には末松A遺跡(11)、末松ダイカク遺跡など、末松遺跡群で集落の拡大が確認されると共に末松庵寺(18)が創建される。この末松遺跡群の東側に位置するのが上林・新庄遺跡群である。末松遺跡群と同じ7世紀初頭から前半にかけての小規模集落の形成が上林新庄遺跡、上林テラダ遺跡(6)で確認された後、7世紀後半以降に集落の規模を拡大していき、やや遅れて8世紀に成立する上新庄ニシウラ遺跡、下新庄アラチ遺跡、下新庄タナカダ遺跡(2)も同じ微高地に立地し、盛衰を共にすることから、一連の集落跡と認識されている。下新庄アラチ遺跡で確認された8世紀から9世紀にかけての大型建物は、周辺を掌握する有力者の住居と推測されており、上林新庄遺跡の南部エリアで確認された專業的な鍛冶遺構はその有力者によって統率されていた工人居住地と理解されている。

開発が7世紀後半以降に本格化することは扇央部全体にも共通するところであり、地下水位の低い疊混じりの土壤を開墾できるだけの道具と技術の進歩を背景として在地領主達が開発に着手した後、計画的に配置された集落構造に変遷を遂げ、近江・丹波系などの移民の居住が確認される末松A遺跡などもあることから、国家的な権力の介在が指摘されてもいる。また、7世紀後半から8世紀にかけて造営を開始された集落の多くが9世紀末までに衰退する点にも一致をみる。

一方、9世紀末以降には三浦・幸明遺跡、橋爪ガンノアナ遺跡、安養寺遺跡(43)などで新たな集落展開がみられ、11世紀代まで継続していく。三浦・幸明遺跡では10世紀前半以降、用水の岸辺に大型掘立柱建物が継続して建設され、高級陶器の出土等から開発領主クラスの居宅と推定され、東接する橋爪ガンノアナ遺跡を含めてエリア比定される押師郷内の拠点的な集落であったと想定されている。安養寺遺跡は、上林遺跡などと共に安養寺遺跡群と総称され、詳細は不明ながらも豊富な縁灰釉陶器の出土などからこのエリアにも10世紀から11世紀にかけての拠点的な集落が展開していたことが推定される。それら拠点的集落とみられる遺跡では土師器の一括廃棄・埋納遺構が複数基確認されており、何らかの祭祀を繰り返し執り行える階層であったことを示唆している。

11世紀末以降から12世紀にかけては荒廃していた扇状地の再開発が行われた時期とされており、再開発に携ったとみられる開発領主層の居館とされる遺跡も數多く点在するが、近年の北陸新幹線建設工事に関連する発掘調査が扇端部近くの白山市域で進み、用水の整備から始まる扇状地再開発の様子が明らかになりつつある。本遺跡近辺にはこの時期の遺跡は確認されないが、北に1.5km離れた三納ニショヤ遺跡(39)や三納トヘイダゴン遺跡で13世紀の小集落が形成されている。また高橋川下流域でも、扇が丘ゴショ遺跡や扇が丘ハワイゴク遺跡(68)で、武士などの居館とみられる鎌倉時代の大型掘立柱建物が検出されている。



(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「松任」・「栗生」・「金沢」使用)

- 1.下新庄フルナワシ遺跡
- 2.下新庄タナカダ遺跡
- 3.下新庄アラチ遺跡
- 4.上林新庄遺跡
- 5.上林古墳
- 6.上新庄テラダ遺跡
- 7.上新庄ニシウラ遺跡
- 8.新庄カキノキア遺跡
- 9.上林遺跡
- 10.栗田遺跡
- 11.末松A遺跡
- 12.末松しりわん遺跡
- 13.法福寺遺跡
- 14.末松館跡
- 15.末松古墳
- 16.末松C遺跡
- 17.古元堂館跡
- 18.末松庵寺跡
- 19.大館館跡
- 20.末松跡
- 21.末松ダイケン遺跡
- 22.末松福正寺遺跡
- 23.末松B遺跡
- 24.末松信濃館跡
- 25.横爪新A遺跡
- 26.横爪新B遺跡
- 27.清金アガトウ遺跡
- 28.福正寺シンキョウ遺跡
- 29.横爪B遺跡
- 30.福正寺ゴコメマチ遺跡
- 31.横爪松の木遺跡
- 32.横爪遺跡
- 33.長竹遺跡
- 34.高田遺跡
- 35.專福寺遺跡
- 36.藤平田ナカシングジ遺跡
- 37.堀内館跡
- 38.三納アラミヤ遺跡
- 39.三納ニシヨサ遺跡
- 40.三林館跡
- 41.木津遺跡
- 42.法蓮寺跡
- 43.安養寺遺跡(柴木遺跡)
- 44.安養寺念仏林遺跡
- 45.安養寺B遺跡
- 46.安養寺C遺跡
- 47.柴木D遺跡
- 48.柴木東遺跡
- 49.柴木南遺跡
- 50.新荒屋遺跡
- 51.部入道B遺跡
- 52.部入道C遺跡
- 53.部入道A遺跡
- 54.曾谷遺跡
- 55.熱野遺跡
- 56.四十万南遺跡
- 57.四十万ヒッカジ遺跡
- 58.四十万B遺跡
- 59.四十万中世墓
- 60.四十万遺跡
- 61.三十刈遺跡
- 62.額谷遺跡
- 63.額谷カネカヤブ遺跡
- 64.大畠キヨウデン遺跡
- 65.頬新町遺跡
- 66.馬替遺跡
- 67.扇台遺跡
- 68.扇ヶ丘ハイゴク遺跡

第3図 周辺の遺跡地図(S=1/25,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

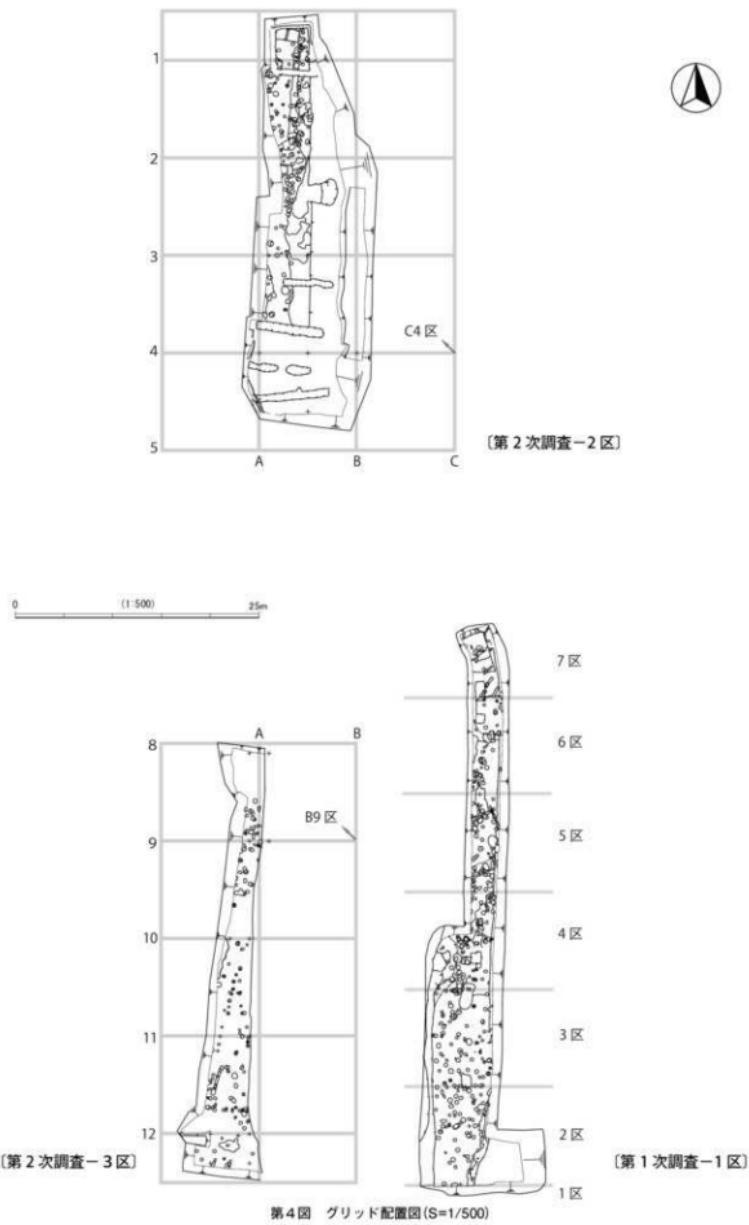
金沢市側の右岸調査区を1区、野々市市側の左岸下流調査区を2区、上流調査区を3区として調査を行った。

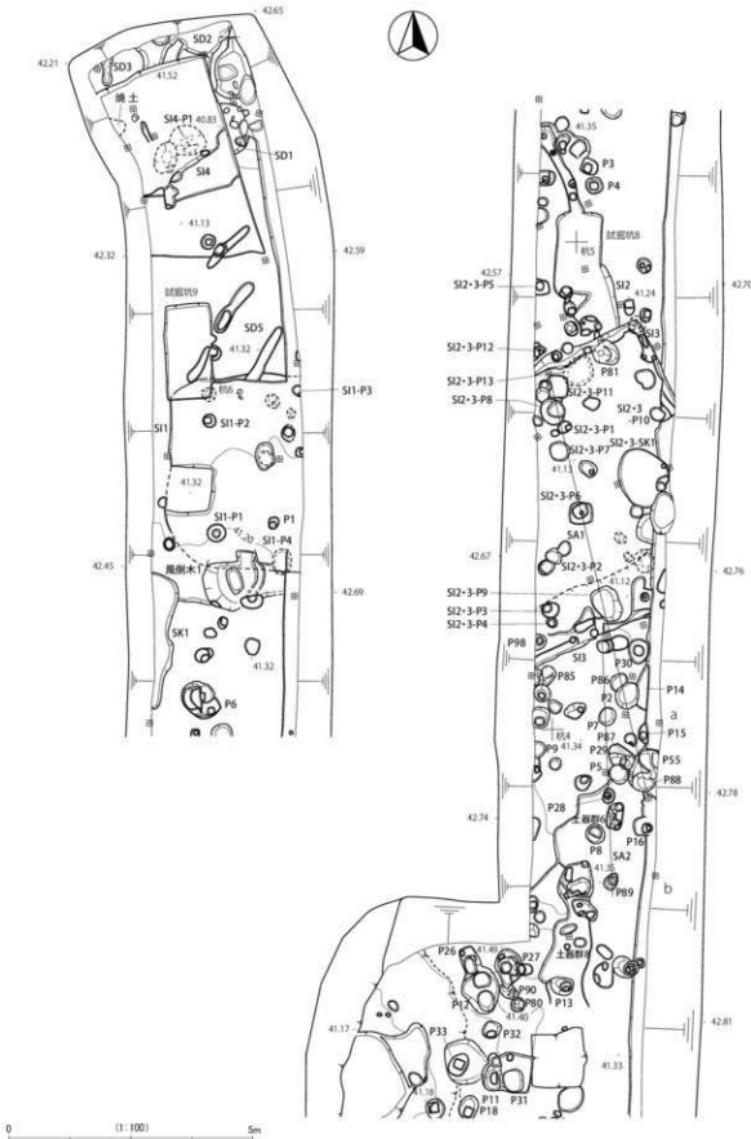
県文化財課が右岸の分布調査を行った際に、護岸工事が未施工の檻面にて包含層や遺構覆土が良好に露頭していたことから、土層断面を図化しており、参考資料として第7図上段に図示した。図化範囲は1区北半の川側にあたり、旧来の護岸壁があった場所である。第1図中に矢印で示した約25m分であるが、基点から4~7m、8~12m、13~16.5mの部分については図化できなかった。なお、図化の基準高が標高42.05mと記録されており、1区の調査成果に照らすと0.5m程度数値が高すぎるのではないかと推定するが、検証できないためそのままの数値で掲載した。この図から、調査できなかった1区北半西側にも大型の落ち込みや柱穴の可能性が高いピットが存在していたことが分かる。

第1次調査1区は幅狭の南北に細長い調査区であったため、グリッド杭は調査区の中心軸付近に任意の南北ラインを設定し、10m間隔で打設した。杭番号をそれ以南のグリッド名とし、1~7区まで存在する。調査区幅は北半部の下端で約3m、南半部下端で約6mであるが、南半部西側は高橋川旧来の護岸工事の際に大きく掘削され、遺構は遺存していなかった。基本土層は4区東壁と1区南壁で観察した。最上層に盛土の黄褐色砂層が堆積するのは共通する。東壁2層の灰色粘土は中世以降の包含層で、北端部では2層下面で中世以降の遺構を検出し、図化後に掘り下げた。3、4、11層の暗褐色～黒褐色シルトが古代以前の包含層であり、壁面観察では掘削面が異なる遺構を確認したが、平面的な調査では細別することができなかった。南壁では10、11層が古代以前の包含層であるが、11層はある時期の遺構掘削面である。2~6層は河川の旧流路である。遺構は北半部に竪穴建物4棟、南半部に掘立柱建物等が展開しており、4区を中心としたエリアの包含層からは多量の土器が出土した。

第2次調査2、3区は公共座標に則ったグリッド杭を10m間隔で設置し、杭番号は東西方向をアルファベットA~Cで、南北方向をアラビア数字1~12で表した。グリッドは南東杭の名称で呼称した。基本土層はいずれも西壁で観察した。共に暗褐色～黒褐色土(2区西壁②の3層、③の1層、3区西壁3~3"層など)が遺物包含層で、その下面が遺構掘削面である。1区で観察された中世以降の包含層は明確には確認できなかったが、3区西壁1層などがそれに対応するものかもしれない。遺構は2区で竪穴建物1棟の他、溝などを検出したが、東側半分は旧河川による擾乱を受けて遺構は遺存しておらず、南半部も中世以降の河川流路を確認したのみで、古代以前の遺構は確認されなかった。南端部のB5区には礫層が広がっており、遺物の出土も見られないことから、河川の氾濫原であったと看做された。3区ではピット数基を検出したに留まる。

遺構番号は1~3区のそれぞれで通し番号を付している。本文中では混同を避けるため、遺構番号の頭に調査区名を付して「1SK1」のように呼称することとする。また、竪穴建物内で検出した遺構については竪穴建物に付随するか否かに関わらず、遺構の通し番号とは別に同一竪穴建物内で遺構名称を付し、「1SI1-P1」等とした。

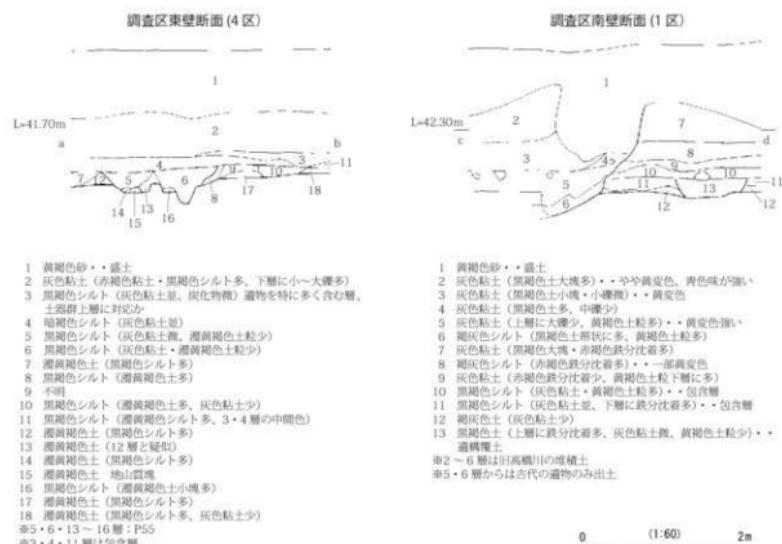
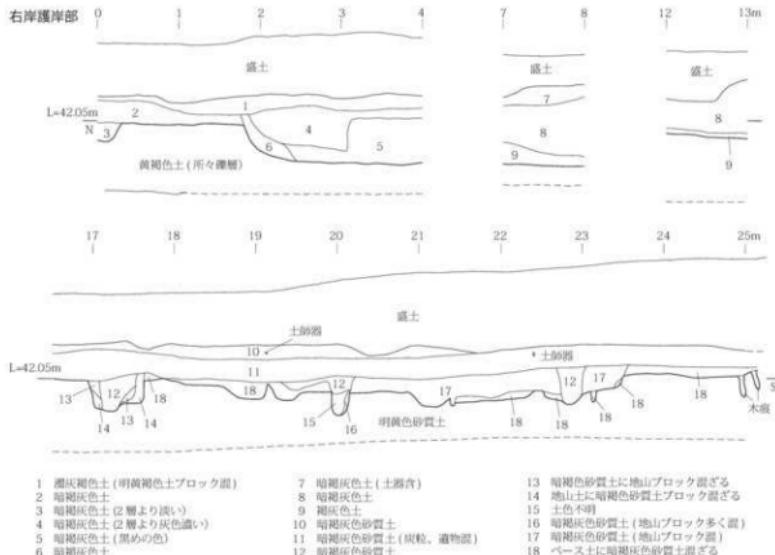




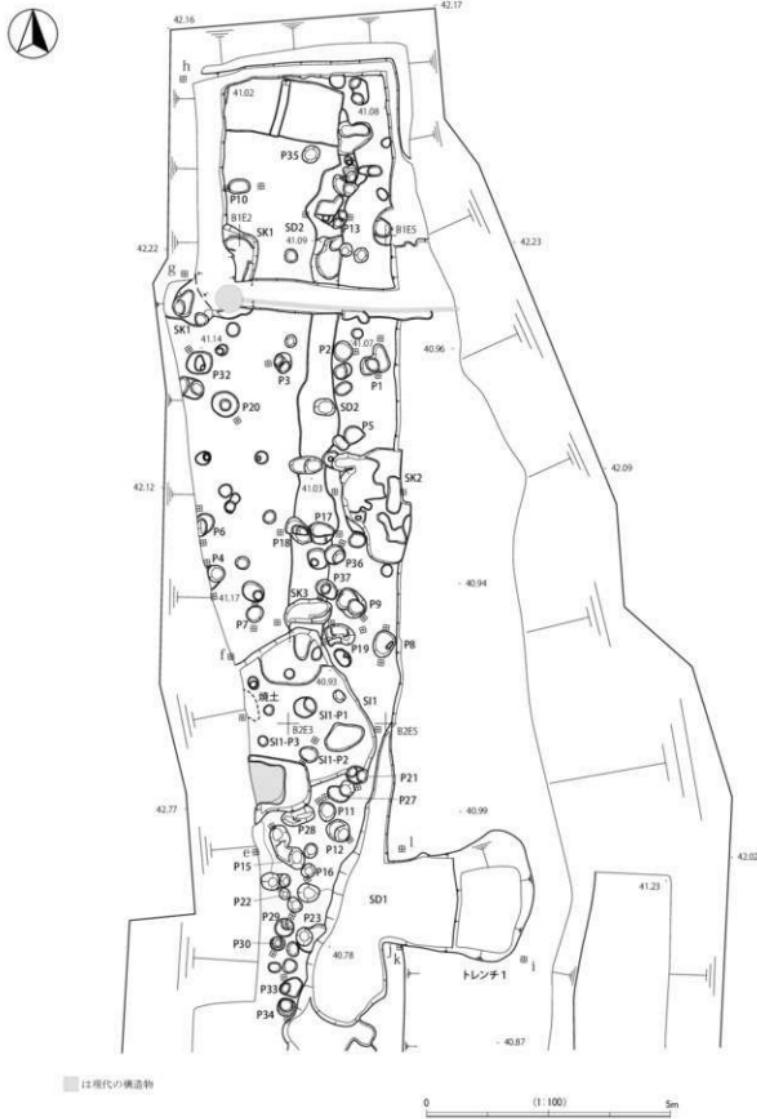
第5図 1区構造配置図1 (S=1/100)



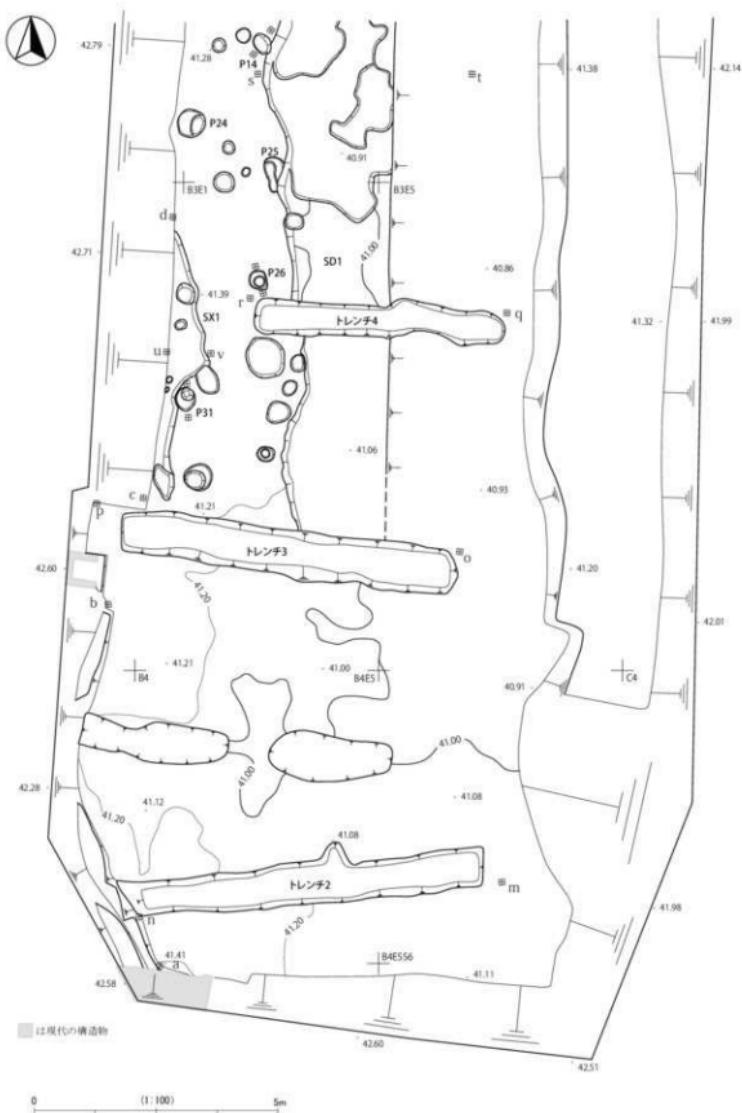
第6図 1区構造配置図2(S=1/100)



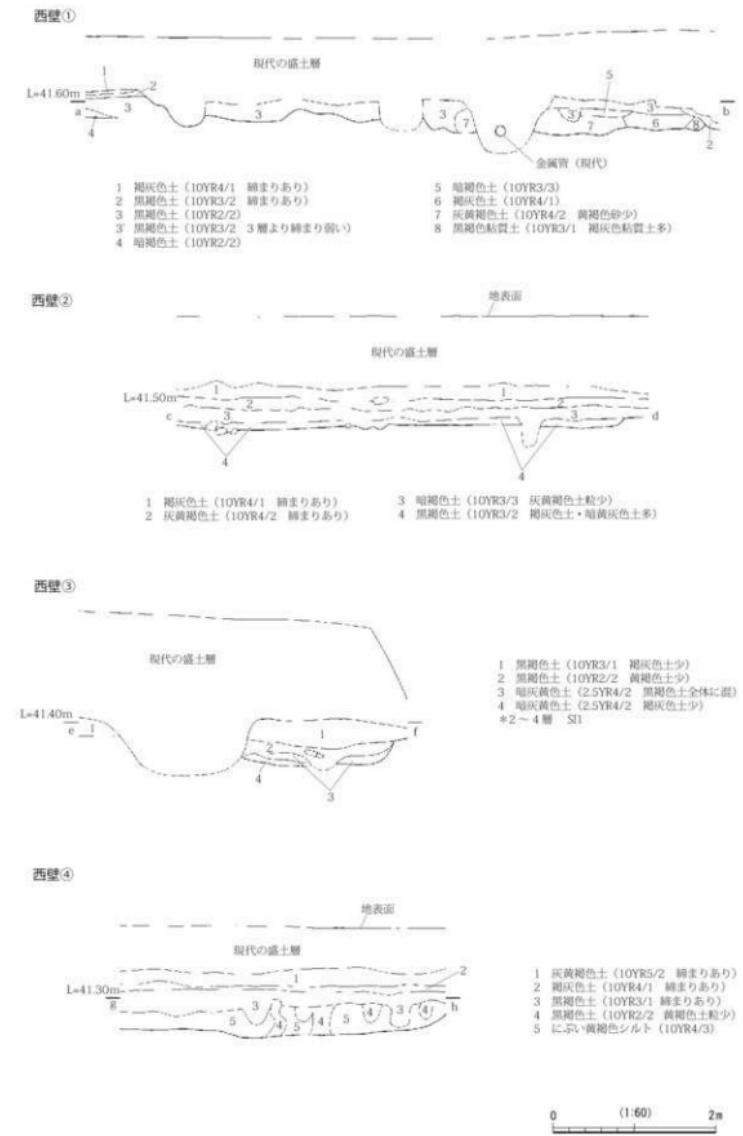
第7図 1区基本土層図(S=1/60)



第8図 2区造構配図1 (S=1/100)

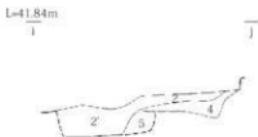


第9図 2区造構配置図2(S=1/100)



第10図 2区基本土層図 1 (S=1/60)

## トレンチ1 南面



- 1 潤灰色粘砂 (SY4/1 大隈多) • 旧河道埋め戻し土  
2 潤灰色粘砂 (SY4/1 大隈多)  
3 灰オーリーブ色砂 (SY5/2 大隈多) • SD1 覆土  
4 灰オーリーブ色砂 (SY5/3 細砂で締まり良し ベース土)  
5 灰オーリーブ色砂 (SY5/3 細砂で締まり良し ベース土)

## トレンチ1 西面



- 1 潤灰色灰土 (SY4/1) • 旧河川埋め戻し土  
2 潤灰色粘砂 (SY4/1 大隈多) • 旧河道埋め戻し土  
3 灰オーリーブ色砂 (SY5/2 土質細片多) • SD1 覆土  
4 灰オーリーブ色砂 (SY5/2 大隈多) • SD1 覆土  
5 灰オーリーブ色砂 (SY5/3 細砂で締まり良し ベース土)

## トレンチ2

L=41.84m  
m



- 1 黒褐色土 (10YR3/1 ~ 3/2)  
2 灰黄褐色土 (10YR5/2 壓少) • ベース土  
3 潤灰色粘土 (10YR4/1 大隈多) • 淋水砂礫層か  
4 潤灰黃褐色砂 (10YR5/2) • 旧河川埋め戻し土  
5 にじみ~灰黄褐色砂 (10YR5/3 ~ 5/1)

## トレンチ3

L=41.84m  
m



- 2 潤灰色粘土~砂 (10YR4/1 ~ 5/1 土質細片多) • SD1 覆土  
3 潤灰色粘土 (10YR4/1 大隈多) • 淋水砂礫層か  
4 潤灰黃褐色土 (10YR5/2) • 旧河川埋め戻し土

※3 層はやや茶色がかる。サビ化着か?  
1 層はこのトレンチ付近で消失

## トレンチ4

L=41.84m  
m



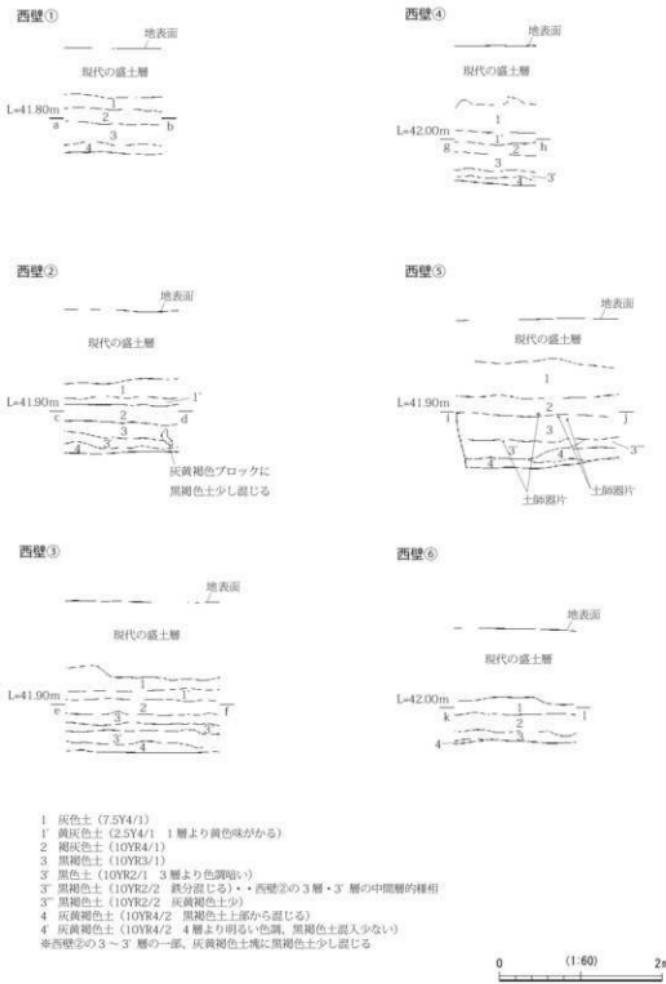
- 1 にじみ黄褐色土 (10YR5/3 ~ 5/4) • ベース土  
2 潤灰色粘土~砂 (10YR4/1 ~ 5/1 土質細片多) • SD1 覆土  
3 潤灰色粘土 (10YR4/1 大隈多) • 淋水砂礫層か  
4 潤灰黃褐色土 (10YR5/2) • 旧河川埋め戻し土

0 (1:60) 2m

第11図 2区基本土層図2 (S=1/60)



第12図 3区段構成図(S=1/100)



第13图 3区基本土层图(S=1/60)

## 第2節 1区の遺構と遺物

### 1. 掘立柱建物・柱列・ピット(遺構:第14~16図、遺物:第25~28図)

**1SB1** 2、3区で検出した。南北2間×東西2間以上の総柱建物として報告する。西側・中央柱列は径0.34~0.46m、柱間寸法2.6~2.7mで揃うのに対し、東側柱列は径約0.3mと小さくて浅く、柱間寸法も2.5m・3.1mとやや合わないことからこの建物に関連した柵列などの可能性もある。中央列は更に2間程度北側に延伸し得るが、西側柱列で延びが確認できないことから、南北軸は2間の建物と考えておきたい。主軸はN2°-W。遺物は土師器小片が出土したのみで時期決定に至らないが、径が小型化して円形を呈し、縄柱とみられること、竪穴建物や他の柱列などと方位軸が異なることから、10世紀以降の建物と推定する。

**1SA1** 4、5区の1SI3を床面まで下げる段階で検出された南北4間の柱列で、1SI2・3-P8・6・9、1P2、1P88で構成される。1SI3の検出段階では確認できなかったが、土層観察で1SI2・3-P9が1SI3の貼り床とその上面堆積土を切り込んでいることを確認したことから、1SI3より新しいことが分かる。柱間寸法は1.8~2.2m、主軸はN-13°-W。柱穴掘方は方形を志向する。1SI2・3-P8が短径0.5m、長径0.56m、深さ0.43m、1SI2・3-P6は一辺0.48m、深さ0.41m、1SI2・3-P9は短径0.5m、長径0.72m、深さ0.27m、1P2は短径0.48m、長径0.56m、深さ0.42m、1P88は柱痕跡部分で径0.4m、深さ0.43mを測る。柱穴の規模から掘立柱建物を構成する柱列と推定しているが、東西方向への延びが確認できなかった。土師器片が出土したのみで、明確な時期は不明である。

**1SA2** 4、5区で検出した南北3間の柱列である。主軸はN2°-Wで、柱間寸法は1.4~1.8m、柱穴径は0.24~0.36mの小型で、深さは0.29~0.41mとややばらつきがある。柱間寸法は異なるが、柱穴が小型で円形を呈する点と、主軸において1SB1に共通する。1P89から第25図1の土師器碗が出土した。

**1P97** 4区で検出した。旧来の護岸工事に伴い削平を受けた箇所での検出であり、遺構下部しか遺存しないとみられるが、土師器碗5点が正置された状態で出土した。うち1枚はやや上方で出土したために遺構検出作業によるものか欠損していたが、4点はほぼ完形である。部分的に重なりが見られるため、折敷等に並べ置いた出土状況ではなく、五方を意識した形跡もないが、その出土状況から意図的な埋納と判断される。3点には1箇所ずつ灯明痕が観察され、何らかの祭祀に使用された後、埋納されたものと推定される。第25図2~6に図示した土師器碗は体部の立ち上がりにやや丸みを帯びるものとそうでないものが混在してはいるが、口径12.7~13.4cm、底径5.2~5.6cm、高さ4.1~4.45cmと法量が近く、総体としてはよく似ており、ロクロ目が顕著、外底部周辺の作りがやや粗雑で使用痕が明確でない点で共通する。この点からも、意図的な埋納が示唆されよう。

**その他のピットと土器群** 4区では包含層から多量の遺物が出土し、いくつかまとまった状態で土器群が出土した箇所を土器群として取り上げた。遺構検出が進むと、土器群の下でピットが検出されたものが多く、包含層として掘り下げた層中から掘削されていたピットが認識できなかったものと判断し、その後はピット番号を付して遺物を取り上げた。このことは、黒褐色系の基盤層から同色系の覆土をもつ遺構が掘削されていたことから竪穴建物などが床面近くまで認識できなかったことと同様で、調査担当者の力量不足が招いたことである。また、いくつかの壁面観察によれば遺構掘削面が何層が存在したことにも関わり、包含層除去後に検出した遺構が、必ずしも遺構検出面から掘り込まれた遺構とは言えないことを明記しておく。

ピットの埋没過程で、土器が捨てられたか入れられた、或いは包含層遺物が混入したことなどが考えられる。下層でピットが検出されなかった土器群についてはその他の項で報告する。なお、遺物についてはピット出土遺物としてまとめたが、遺物観察表の出土地の記載は、土器群として取り上げたものと下層で検出されたピット内から出土したものとを判別できるよう、取り上げ時の記載のままとした。したがって、土器群として取り上げられたものが上層位、ピットとして取り上げられたものが下層位からの出土と言える。それらは接合した破片も多い。

IP5は4区の土器群5の下で検出されたピットである。柱痕跡とみられる2層に遺物が殆どなく、掘り方理土の3層には土師器が多く出土したことから、柱を設置した際に包含層中の土器が混入したものと判断される。第25図7～10を図示した。9が上層の土器群出土、他はピット内出土である。いずれも土師器で、7は華奢でやや足高の高台をつけた椀、8はいわゆる菊花状かき出し高台を持つ内黒柄、9は口径に比して底径が小さめの椀、10は小皿である。土器様相から11世紀以降の遺構と判断される。

IP8は土器群7の下で検出したもので、出土状況からIP8の埋没過程で包含層遺物が凹みに落ち込んだと想定される。第25図11～13を図示した。

IP11は土器群11の下で検出し、これも埋没過程で包含層遺物が混入したものと推定される。第25図14、15の土師器を図示した。14は観察表では椀としたが、浅椀、または皿である。

IP12は土器群9の下で検出した。IP12は2基のピットが南北に切り合っており、新しい南側ピットの柱痕跡部分には遺物の集中が見られなかったことから、北側の古い柱穴IP12(古)に伴う遺物群と判断される。第25図16～24が出土した。IP12(古)の柱痕跡部分から16の線刻土師器が出土したが、底面からの出土ではないことから柱根抜き取り後に他の土師器と共にに入ったものであろう。16は土師器の底部片であり、椀とするには径が大きいことから鉢と報告する。内底面に文字がヘラ状具で焼成前に刻まれており、「本凡」と訛読できる<sup>(1)</sup>。特殊なものであり、意図的に埋納したと考えたいが、他の出土遺物も含めて比較的の残りはいいものの、完形には復元されないことから一括廃棄とみるには問題が残る。21～24は土師器小皿である。法量は近似するがプロポーションはやや異なり、胎土も礫が多く含まれる21、22、24と含まれない23に分けられる。

IP13は土器群12の下で検出した。遺物量は比較的多いが、完形とならない破片ばかりであることから、埋没の過程で包含層遺物が混入したものであろう。第26図26～35の土師器を図示した。26は薄手の浅椀に分厚く高い高台がつく製品でバランスはよくない。27を皿、28～31を椀と記載しているが、椀皿いずれに置くかは微妙な製品である。33の内黒土師器椀はIP13最下層出土破片、土器群9出土破片と接合した。

IP17は土器群1の下で確認した。最も出土量が多く、完形率も高い。また、灯明痕が付着する個体も定量みられることから人為的に廃棄されたものである可能性が高い。IP17柱痕部出土破片と土器群1の接合資料があることから、柱根抜き取り時の儀礼に伴うものと想定するが、据え置いたような出土状況ではない。第26・27図36～49を図示した。36～38はIP17柱痕跡から出土、39～49は土器群として取り上げた遺物である。法量、プロポーションは概ね類似しているが、その中でも1箇所ずつの灯明痕が付着する36、37、39の3点は厚い底部からやや内湾気味に立ち上がる体部、口縁内面直下に強いナデを施す点で共通し、灯明容器として一括して選ばれた可能性が高い。48も灯明痕が付着する土器であるが、プロポーションはやや異なる。38は内底面から口縁部にかけての半分程度と外面の一部に付着物が観察され、拡大観察によって付着物表面に多量の初痕を確認した(図版14)。何か有機物とともに糊が入れられていたものと判断される。灯明痕をもつ椀の存在を考慮すると、儀礼の際

に捧げられた稻穀の可能性が考えられる。図示しなかった遺物には内黒有台椀1個体、土師器有台椀1個体が含まれるが、他は全て無台椀で占められる。

IP22は土器群2の下で確認したが、出土点数も少なく、人為的要素も見られない。埋没過程で混入したと推定する。第27図50を図示した。土師器小皿であるが、他遺構出土の小皿とは異質で、器壁が厚く、体部の立ち上がりが急である。

IP26は土器群10の下で検出した。IP12より古い。遺物の出土点数は多くなく、完形でもない。IP26柱痕跡出土遺物が土器群10と接するが、柱根抜き取りの際に包含層遺物が混入した可能性が高い。第27図52～54を図示した。

第27図55～第28図72は土器群以外のピット出土遺物である。60～63はIP27出土遺物である。60は須恵器有台椀で、底部を回転糸切りで切り離した後に高台を削り出している。緑灰釉陶器を模倣した製品であろうか。田嶋編年Ⅵ<sub>3</sub>期の製品とみられることから、遺構の時期もその頃と判断する。なお、60～62は遺構東部に小さく飛び出した段掘りのピット状箇所からの出土であり、別遺構が切り合っていた可能性もある。IP81は1SI3上面で検出したピットで、第28図70の緑釉陶器碗が出土した。図では不分明だが、付高台で高台端部内面にかすかに段を持つ特徴から近江産と判断される。釉は外底部まで施されており素地は軟質である。

## 2. 壊穴建物(遺構：第17～20図、遺物：第28図)

**1SI1** 6区で検出した。東側が調査区外に延びるが、一辺約4mの隅丸方形形状を呈すと推定される。南西角を試掘坑、西辺の一部をコンクリートブロックによる損壊を受け、南辺では風倒木を切り込んでいる。表土掘削時に遺構掘削面の把握が困難で下げすぎてしまったために、検出した段階ではほぼ床面に近い状況であった。東壁での土層観察によると掘削面から貼り床面までは0.25～0.3mの深さを有していたことが分かる。土層観察では明確な壁際の落ち込みは認められなかったが、南部で切り合う風倒木の東側で部分的に溝状の落ち込みを確認しており、壁溝の痕跡である可能性も指摘できる。主柱穴は南北に並ぶ1SI1-P1・2の2基のみを検出した。柱間寸法は2.3mで、床面からの深さは0.22m、0.27mを測る。その配置からおそらく4本主柱と推定される。東壁の13・17・20層には硬化が認められたことから貼り床と想定され、貼り床が途切れた部分の22～24層中には少量ながら炭化物や焼土が確認されることから、南東角付近にカマドが敷設されていた可能性が高い。1SI1-P4の覆土は焼土粒を多く含む赤褐色土でありその関連遺構とみられる。柱穴と推定した1SI1-P1から被熱した石が出土しており、カマド袖石の可能性もある。

遺物は第28図73～77の須恵器杯蓋、土師器甕、刀子状の金属製品などを図示した。73、74は比較的大振りで、73の天井部外面はケズリ調整されている。共に田嶋編年Ⅲ期の製品とみられる。75は1SI1-P1南東そばで出土した。土師器甕は他にもタキとて具痕を持つ製品も出土している。

**1SI2・3** 5・6区で検出した。1SI1と同じく表土掘削時に遺構掘削面の把握が困難で下げすぎてしまつたために、検出した段階ではほぼ床面に近い状況であった。2棟の堅穴建物が切り合っており1SI3が新しい。検出当初は境が分からなかったため、遺物は1SI2・3としてまとめて取り上げ、内部で検出した遺構も「SI2・3」と冠している。

1SI2は南部を1SI3に、東辺を試掘坑に切られて西側は調査区外へ統くため全体像は捉えられないが、北端でわずかに北東隅が確認できることから一辺4.4m以上の方形、又は長方形を呈するとみられる。東辺壁際には壁溝が巡り、南東隅にカマド痕跡を確認した。カマドは袖部とみられる地山塊が部分的に遺存していたものの残りはよくなく詳細は不明である。北側に焚口が開口していたものと判断され

た。床面までの深さは0.25～0.3mを測る。柱穴は未確認である。1SI2内部で検出された1SI2・3-P5は堅穴建物埋没後に掘削された遺構であり本遺構とは無関係である。出土遺物が少なく、時期は不明であるが、須恵器瓶類片や内外ハケメ調整された土師器甕片が出土している。

1SI3も東西が調査区外に延びており全形は窺えないが、一辺が5.5～5.7mの方形、又は長方形を呈すると推測される。壁際には壁溝が巡る。床面で検出した1SI2・3-SK1の覆土最下層にわずかながら焼土が確認されたことから、1SI2と同じく南東隅にカマドが敷設されていた可能性がある。掘削面から貼り床までの深さは0.2～0.25mを測る。西壁断面の30・52層などに硬化が確認され、貼り床とみられるが、南辺に沿って幅約1.1mほどで貼り床が明確には捉えられなかった箇所が溝状に確認され、破線で図示した。西側断面の27層がそれに当たり、1SD4として調査している。土層断面からは堅穴建物貼り床から掘り込んでいるようにも理解できるが、底径の小さい土師器椀、第29図94のような低い柱状高台風の土師器底部片などが出土していることから11世紀代に降る可能性がある。ただし、堅穴建物南壁際は切り合う遺構が多く検出された箇所でもあり、それらの遺物が混入している可能性もある。

1SI3内部で検出した1SI2・3-P6・8・9、1P81・98は掘削面が把握でき、本堅穴建物より新しいことが分かっている。1P81・98からはそれぞれ綠釉陶器、灰釉陶器が出土した。また、1SI2・3-P4からも第28図78の綠釉陶器が出土していることから、新しいと判断される。残った堅穴建物内ピットからは主柱穴を抽出できなかった。壁立ちの建物だとすれば北東隅で検出したピットや1P81北西で検出したピットなどが柱穴となる可能性もあるが、心々間で1mほどしかなく、可能性は低い。また、北半部を中心に、貼り床下で堅穴建物の掘り方とみられる落ち込みを確認し、貼り床より古い1SI2・3-P13などを検出した。

遺物は第28図78～81を図示した。81は1SI2・3-SK1出土、79、80は1SI3床面出土である。79は須恵器杯もしくは椀、80は土師器皿である。VI期に降る製品とみられ、床面出土であることから1SI3の時期を推認できる資料であるが、VI期以降にこのようなやや大型で整った形の堅穴建物が残るのか疑問があり、切り合う別遺構の遺物の可能性も考え得る。1SI2・3-P4出土の78は、外底部には施釉が見られず、かすかに回転糸切り痕を残す。貼り付け高台で内面の立ち上がり際に段を有する。近江産とみられる。

**1SI4** 7区で検出した。南辺しか確認しておらず、平面形も法量も不明であるが、調査区西壁近くで焼土とカマド壁を検出しておらず、方形又は長方形の平面形態が想定される。南辺の方向軸は1SI2・3に類似する。堆積土は調査区東壁で観察した。基盤層が北側に向かって落ち込んでいたことから、当初は鞍部と想定していた。掘り進めるうち、固く締まった貼り床を確認し、カマド痕跡を検出したところから、堅穴建物と判明した。平面的にはプランは検出できなかったが、断面観察から9・17～19層南側を堅穴建物の立ち上がりと判断した。床面までの深さは約0.3m、掘り方までの深さは約0.5mである。カマドは、構築材とみられる地山質のカマド断面11、12層を確認し、その西側で焼土を多く含む層を確認した。北側には袖石に使用されたのではないかと推定された凝灰岩があり、その下に堆積する4層は焚き口付近と想定された。また、調査区西壁の土層観察で、カマドの天井崩落土と推定される赤化した地山塊を含む堆積土を確認した。主柱穴、壁溝は確認できなかった。1SI4-P1とその西側ピットは貼り床掘り下げ後に検出した遺構であるが、この辺りには固く締まった貼り床が確認されていなかったため、貼り床上面から掘削されていたのを見逃した可能性も否定できない。西側のピットが新しく、掘り下げる段階で柱痕跡を確認したことから柱穴と判断される。仮に貼り床上面から掘削されていたとしても、西側ピットはカマド袖部の延長線上に位置することからカマドと同時期

の存在は否定されるものである。

遺物は第28図82～86を図示した。84が覆土上層出土、他は1SI4-P1出土である。82は薄手の須恵器杯蓋、83は赤彩土師器碗である。83は口縁端部にかすかに面を取っている。85、86は非クロコロ土師器甕で、共に外面にはススが付着する。他にカマド付近から非クロコロの土師器甕や細身の棒状尖底を持つとみられる製塙土器の口縁部片などが出土している。84は埋没過程で混入した遺物とみられ、83も時代が降る可能性がある。カマド付近の出土遺物から、7世紀前半に機能していた堅穴建物と考えておきたい。

### 3. 土坑(遺構: 第21図、遺物: 第28・29図)

**1SK1** 6区の西壁際で検出した。南北28m、東西0.5m、深さ0.25mの落ち込みである。西側は調査区外に続くため全形は不明である。底面の一部に貼り床のような硬化が確認されたことから、堅穴建物の可能性がある。また、底面に焼土の堆積(18層)が見られたことから、堅穴建物だとすると炉、又はカマドの痕跡と想定し得る。遺物は内外をハケメ調整した土師器甕片が出土した。

**1SK2** 3、4区で検出した。短軸1m、長軸2.7m、深さ0.45mを測る隅丸長方形の土坑である。壁の立ち上がりは南側が他方に比べてかなり緩やかである。堆積土はレンズ堆積を為しており、自然に埋没したものと推測される。埋没過程で土器が投げ捨てられたようで、土層観察アゼより南側の土坑中央部付近で遺物がまとまって出土した。なお、土坑上面で出土した土器群3は本遺構が完全に埋没した後の遺物であり、本遺構とは無関係である。

遺物は第28、29図87～93の土師器碗と土師器甕を図示した。土師器碗は法量、体部の立ち上がり形状に違いが認められるものの、外底部に静止糸切り痕を残すことで共通する。87は体部の立ち上がりが比較的直線的なタイプ、88、89は体部が丸みを持って立ち上がるタイプで、口縁端部はやや内湾気味に収める。いずれも通常の土師器碗には見られない器形であり、須恵器模倣と思われる。土師器甕は90、91の長胴甕と93の小甕を図示した。90は上半に内外ともカキメ調整が為されるが、下半にはタタキの後にハケ調整された痕跡がよく残っている。93は小さいながらも外面は強く被熱しており器表がはじけている。92はもう少し傾きが寝るとみられ、やや内湾気味にすぼまる口縁形態から鉄鉢型の製品とみておきたい。土師器碗88はIV<sub>1</sub>期の須恵器無台杯の模倣とみられ、土師器甕も8世紀後半の製品と思われることから、他の碗も併せて同時期の製品と推定される。

### 4. 溝・河川(遺構: 第7・14図)

**1SD1・2・3** 7区で検出した。古代包含層上面で検出した遺構群である。中世の包含層とみられる灰色粘土を覆土に持つことから中世の遺構と判断したが、出土遺物は古代の土師器碗のみである。下層に位置する1SI4掘削後の壇面上土層観察で、1SD2・3の間に同時期とみられるビットなども確認されたことから、周辺に中世の掘立柱建物が存在したと推定される。

**1SD5** 6・7区、1SI1上面で検出した。幅0.2m、深さ0.1m未満の細溝で、同様の溝が0.7～0.9m間隔で北西部に2本並走する。堅穴建物埋没後に畠地化したものであろうか。

**川跡** 調査区南東部の1、2区で検出した。基本土層として図示した第7図南壁2～6層がそれにあたる。西肩部を掘削したのみで、部分的に東西方向のトレンチを設けて下層位を確認した。その結果、遺物出土量は極めて少ないものの、5、6層からは古代の遺物が出土した。6層はその堆積状況から古代の包含層である10層の崩落土と判断された。遺構検出面から底面までの深さは0.4m程度であるが、南壁土層で確認された肩部からの深さは12m以上である。幅は5.7m以上で、東側は調査区外へと延

びている。最下層は赤子頭大の礫が多量に堆積しており、その規模から幾度となく流れを変えたと推定される高橋川の旧流路と想定する。時代については古代以降としか言えないが、川際まで古代の柱穴とみられるピットが密集していることから少なくともこの地に存在した古代集落の廃絶後の流路と考える。

#### 5. その他(遺物: 第29・30図)

**土器群** 土器群3は1SK2上面で検出された遺物群である。第29図94は土師器椀底部であり、底部の形状は低い柱状高台風である。土器群8は溝状に検出された礫の間から出土したもので、第29図95～103が出土している。包含層遺物の集積と判断したが、97、98は最下層から伏せられた状態で出土していることから、意図的に据え置かれた可能性も否定できない。

**包含層ほか** 包含層ほか遺物として第29・30図104～113を図示した。このうち105、107は表土掘削時の出土遺物で、他は3、4区の遺構検出、包含層遺物である。111は緑釉陶器の輪花碗、112、113は灰釉陶器の皿と瓶である。113は1SK2土層観察アゼ上面から出土した。

### 第3節 2区の遺構と遺物

#### 1. ピット(遺構: 第22・23図、遺物: 第30図)

北半部を中心にピットを多数検出し、土層堆積状況から柱穴とみられるものも確認したが、掘立柱建物の復元には至らなかった。覆土は黒褐色系のものが中心であることから古代に帰属するものが大半とみられるが、2P4・7・8・11などは灰色系の堆積土が確認されることから、中世に帰属する遺構の可能性がある。これらの遺構はB2・3区の境辺りに集中している。遺物は2P1から出土した第30図114の土師器椀と2P35出土の打製石斧115を図示した。114は付け高台で比較的大振りの製品とみられる。115は混入であろう。他に、図示していないが、2P15からはⅡ<sub>1</sub>期頃の須恵器杯蓋片が出土している。

#### 2. 壇穴建物(遺構: 第23図、遺物: 第30図)

**2S11** B2・3区境で検出した。西側は調査区外へ続き、南西部は污水井による搅乱を受けている。一辺約3.1mの略方形を呈すると推定する。北東部で焼土を確認していることから、その付近にカマドが構築されていた可能性もある。貼り床や壁溝は検出されず、底面で検出したピットも並びが不揃いで、柱穴としては抽出できなかつた。遺物は第30図116～119を図示した。116は須恵器杯身で、床面近くで出土した。内外面に「\*(アスタークス)」様の刻線文が焼成前に彫られている。Ⅱ期の製品とみられる。図示しなかつたが、非口クロ成形の土師器煮炊具なども出土していることから、7世紀後半頃の遺構と推定される。他にIV又はV期と推定される須恵器片が出土しているが、上面を切り込む2SD2の遺物と判断した。119の打製石斧も混入である。

#### 3. 土坑(遺構: 第23・24図)

**2SK1** B2区で検出したが、排水沟、配水管埋設による搅乱のために部分的にしか遺存せず、平面形状は判然としない。深さは北東側で0.34mを測る。南西部のピット状の落ち込みは切り合い関係にある別遺構であろう。遺物は図示しなかつたがI又はⅡ期とみられる須恵器壺片が出土していることから、該期の遺構とみている。

**2SK2** B2区で検出した。東側は旧河川の搅乱により遺存しないが、西側は径2.3mの略半円形を呈す。底面に不整形な落ち込みがいくつかみられ、深さは最大で0.44mを測る。遺物は古代の土師器碗片、内外ハケメ調整の土師器甕片が出土した。

**2SK3** B2区の2SD2上面で検出した。短径0.5m、長径0.9m、深さ0.35mの長円形を呈す。遺物は土師器碗小片が出土した。

#### 4. 溝(遺構: 第24図、遺物: 第30図)

**2SD1** B2・3区で検出した。湾曲する溝で、延長約17mを検出したが、東側は旧河川跡によって搅乱を受けている。砂や礫などを含む堆積状況から河川跡と判断され、その規模や場所から、高橋川の旧流路と推定される。遺物は第30図120～122の須恵器杯、縁軸陶器碗を図示したが、他に須恵器瓶類と古代の土師器碗を主として、白磁、青磁、中世土師器皿などが少量出土しており、その年代から15世紀以降の流路と判断される。1区南端部で検出された川跡が、1区北側で蛇行して繋がることも想定し得るが、1区川跡からは中世に降る遺物は出土しておらず、可能性は低いと考える。

**2SD2** B1・2区で検出した。ほぼ南北に軸を持ち、延長約20mを検出した。幅0.54～0.90m、深さ0.05～0.09mと浅い。南端部は2SI1の東西アゼまでは確認できたが、以南は検出されなかった。2SI1より新しい2SI1出土遺物として取り上げたIV又はV期の須恵器が本遺構に帰属する遺物と推測されることから8世紀後半～9世紀代の遺構とみておきたい。水流痕は確認されず、南北軸であることから区画溝と推定する。

#### 5. その他(遺物: 第31図)

トレンチ等の出土遺物を第31図123～125に図示した。123の須恵器瓶類、124の白磁碗は共にトレンチ1から出土したもので、2SD1の遺物である可能性が高い。125の磨石は搅乱から出土した。両手でないと持てない大型品であるが、側面にも敲打痕が観察される。

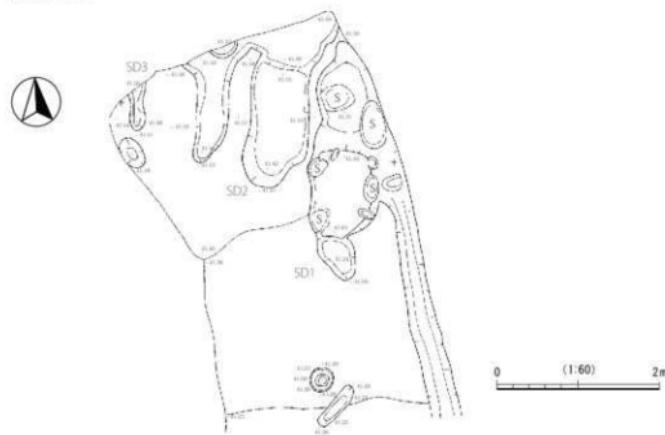
### 第4節 3区の遺構と遺物(遺構: 第25図、遺物: 第31図)

3区はピットが散発的に検出されたのみであり、第25図に遺構実測図をいくつか図示したが特筆すべき遺構はない。3P6、3SD1・2、3SX1は覆土が灰色系であることから中世以降の遺構である可能性が高い。1区と同じ黒褐色系の古代包含層の堆積は認められるが遺物の包蔵は多くなく、遺物が出土した遺構は、A B 10区以北で3P25の1基のみ、以南では27基を数え、南半部が明らかに優位である。遺構の様相からしても右岸の1区南半部に類似しており、3区南半部は、もとは陸続きだったとみられる1区南半部と一体的に捉えられる。

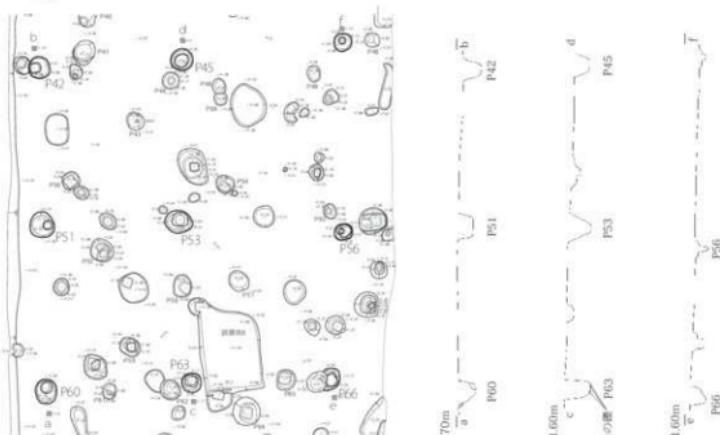
遺物は第31図126～129を図示した。126は3P21の出土、127、128は表土掘削時の出土である。他にA 12区のピットからは土師器片が出土しており、3P20からは低い柱状高台風の土師器底部片が出土している。また、B 11区の川側壁面からは灰釉陶器が出土した。

## 〔1区 溝・掘立柱建物〕

SD1~3

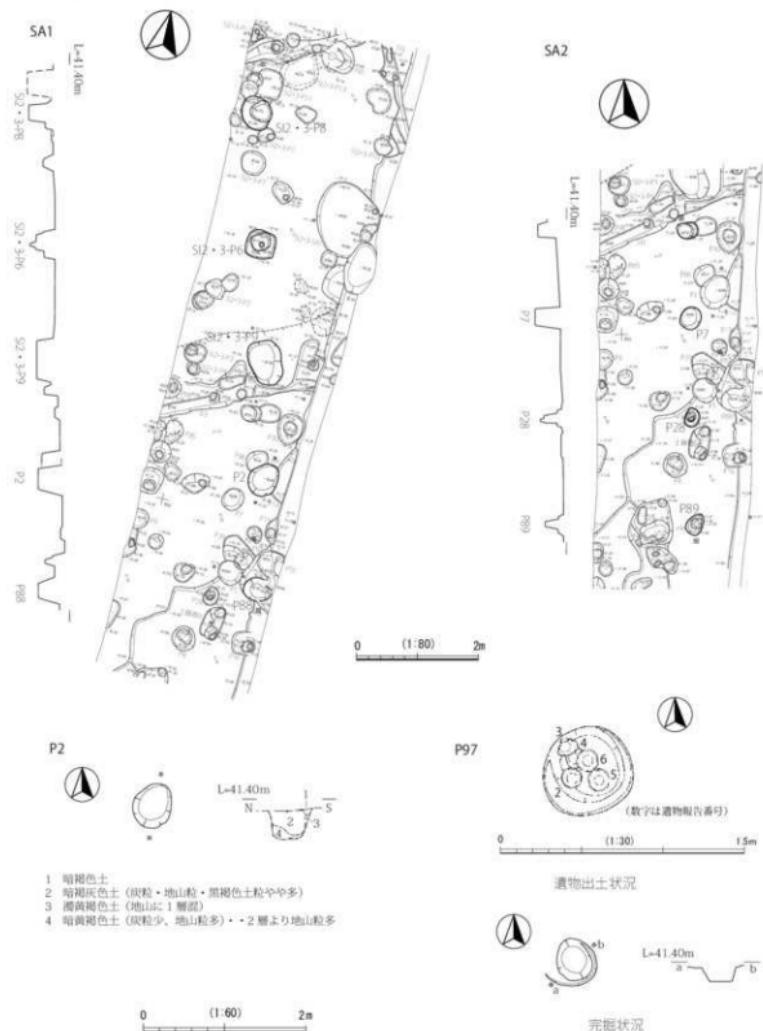


SB1



第14図 1区造構図1 (SD S=1/60、SB S=1/80)

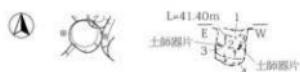
[1区 柱列・ピット]



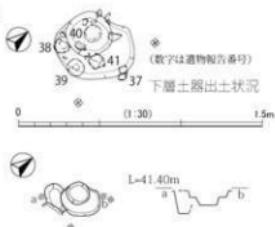
第15図 1区造構図2 (SA、ピット S=1/30・1/60・1/80)

## [1区 ピット]

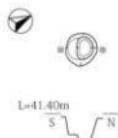
P5(土器群5)



P17(土器群1)



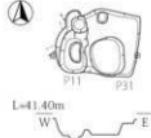
P8(土器群7)



P10(土器群4)



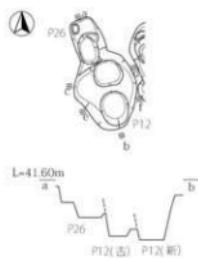
P11(土器群11)



P13(土器群12)



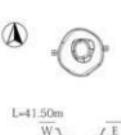
P26(土器群10)、P12



P12(古)(土器群9)



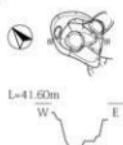
P22(土器群2)



P19



P27



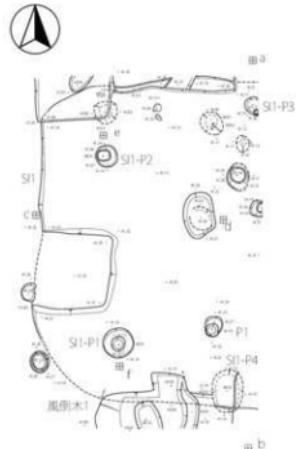
P81



0 (1:60) 2m

第16図 1区遺構図3(ピット S=1/30・1/60)

〔1区 設穴建物〕



(全体を破壊で図示したものは床面振り下げ後に検出した遺構)

東西断面



東壁断面

- 1 黄灰色砂（地表下10~15cmに小々ラス層が10cm厚で堆積）・公園盛土
- 2 灰色粘土（僅少）
- 3 褐灰色粘質土（僅少）
- 4 褐灰色粘質土（灰色粘土が所々マーブル状に混ざる、10~20cm程度の僅多）
- 5 褐灰色シルト
- 6 暗褐色シルト
- 7 底褐色シルト（地山粒少）・P1
- 8 暗褐色シルト（黒褐色土粒・地山粒やや多）
- 9 暗褐色シルト（地山粒少）
- 10 底褐色シルト
- 11 黑褐色シルト（灰粒・地山粒少）
- 12 褐色シルト（地山粒やや多）
- 13 黄褐色シルト（黄褐色土粒・暗褐色土粒やや多）・上面硬化。貼り床
- 14 底褐色シルト（地山粒少・暗褐色土塊幾）

- 15 にぶい黄褐色シルト（暗褐色土粒・灰色粘土粒少）
- 16 濃黄褐色土（褐色土多）
- 17 黄褐色土（褐色土多・黒褐色土微）・硬化。貼り床
- 18 にぶい黄褐色土（暗褐色土微）
- 19 にぶい黄褐色土（暗褐色土並）
- 20 暗褐色土（黄褐色土少）・硬化。貼り床
- 21 暗褐色土（濃黄褐色土少）
- 22 暗褐色シルト（健士並、灰色粘土・炭化物微）
- 23 褐色シルト（健士少・黄褐色土並）
- 24 暗褐色土（黄褐色土多・健士少）
- 25 暗褐色土（褐色土・黒褐色土並）
- 幸地山：黄褐色シルト・細砂
- #7-13 層：SI1 貼り床
- #22 ~ 25 層：ママド由来？

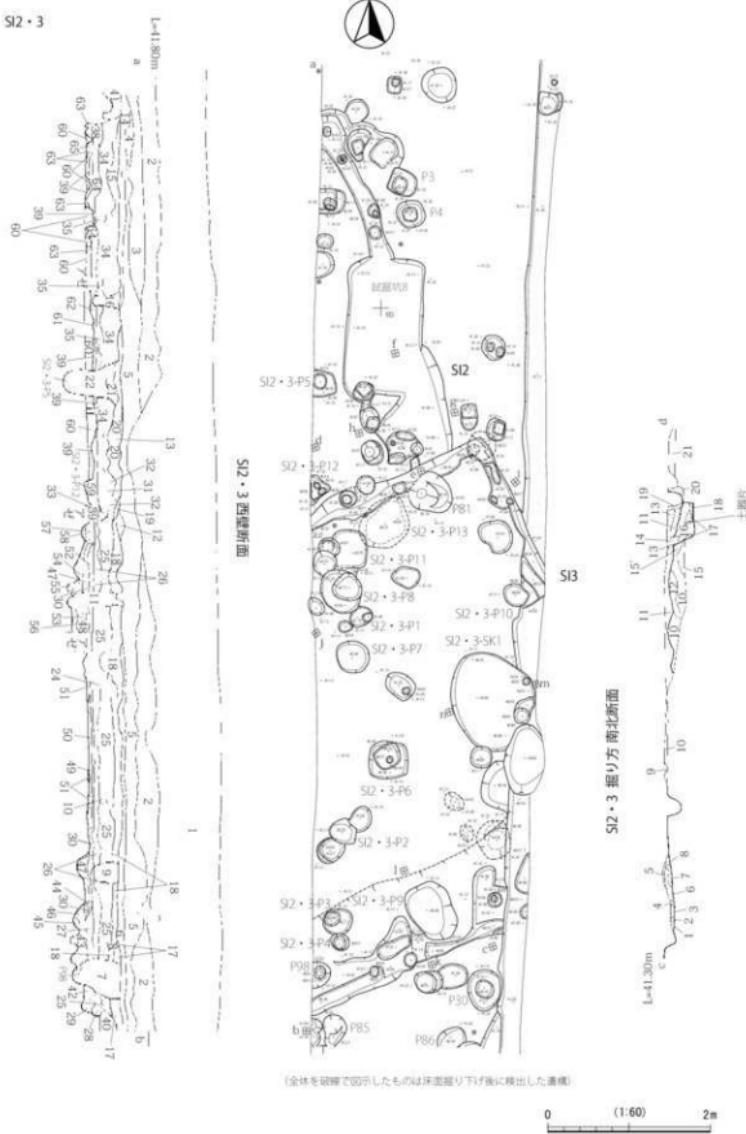
東西断面

- 1 黒褐色土（地山粒少）・P1か？
- 2 暗褐色土
- 3 濃黄褐色土（黄褐色土多）・少量硬化した粘土粒入る
- 4 濃黄褐色土（黒褐・暗褐色土多）・硬化。貼り床
- 5 暗褐色土（黒褐色土・黄褐色土多）
- 6 暗褐色土（黄褐色土少）
- 7 濃黄褐色土（暗褐色土多）
- 8 濃黄褐色土（暗褐色土多・黄褐色土少）
- 9 暗褐色土 剥離か
- 10 濃黄褐色土（黒褐色土・暗褐色土並）
- 11 黄褐色土（暗褐色土少）

0 (1:60) 2m

第17図 1区遺構図4 (SI1 S=1/60)

## 〔1区 堅穴建物〕



第18図 1区造構図5 (SI2・3 S=1/60)

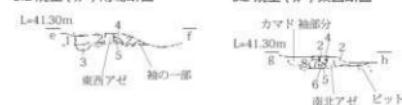
## 【1区】堅穴建物

- S2・3 西面断面
- 1 黄褐色土 (上面/パラス) • ダル・トタン板・針金等入る
  - 2 灰色土
  - 3 坚褐色土 (5-10cm 大塊並, 灰色粘土塊混)
  - 4 坚褐色土 (3層) 同質, 灰色粘土が堅状に入る) • 包含層に盛土 2 層
  - 5 坚褐色土 (灰粒・土塊粒少・灰色粘土が堅状に入る) • 包含層に盛土 2 層
  - 6 坎赤褐色土 (18 層に既分が沈着した層) • 包含層
  - 7 坎灰褐色土 (灰粒・土塊粒少) • P98
  - 8 坎灰褐色土
  - 9 坎灰褐色土 • Pt
  - 10 坎灰褐色土 • 木枠か
  - 11 坎褐色土 • Pt
  - 12 坎褐色土
  - 13 にぶい黄褐色土
  - 14 坎赤褐色土 • 6 層と同じ
  - 15 坎褐色土 (地山塊や多)
  - 16 次褐色土 (地山小粒混) • Pt
  - 17 坎褐色土 (灰粒少) • 包含層
  - 18 黑褐色土 • 古層
  - 19 黑褐色土 (地山塊多) 18 層に地山が混ざった層 • 包含層
  - 20 坎褐色土 (地山塊少)
  - 21 黑褐色土 (部分沈着)
  - 22 坎褐色土 (灰粒少) • S2・3-P5
  - 23 次褐色土
  - 24 坎褐色土
  - 25 坎褐色土 (地山塊・黑褐色土塊や多)
  - 26 坎褐色土 (地山塊や多)
  - 27 坎褐色土 • 南面に沿って溝状に堆積
  - 28 L=29 黄褐色土
  - 29 L=29 黄褐色土 • 28 層より黄色味強
  - 30 潜黃褐色土 (潜褐色土塊多) • 上層硬化, 貼り床
  - 31 坎褐色土 • (地山塊・灰粒多) • Pt か
  - 32 坎褐色土 (地山塊・黑褐色土粒少) • Pt か
  - 33 坎褐色土 (地山塊・黑褐色土粒少)
- S3 坚褐色土 (地山塊・黒褐色土塊少) • 上層硬化, 貼り床
- S4 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S5 坚褐色土 (地山塊多) • 地山
- S6 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S7 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S8 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S9 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S10 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S11 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S12 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S13 坚褐色土 (地山塊少) • 地山
- S14 坎褐色土 (地山塊少) • 地山
- S15 坎褐色土 (地山塊少) • 地山
- S16 坎褐色土 (地山塊少) • 地山
- S17 坎褐色土 (地山塊少) • S2・3-P13 覆土
- S18 坎褐色土 (地山塊少) • S2・3-P13 覆土
- S19 坎褐色土 (地山塊少) • S3 屋清覆土
- S20 坎褐色土 (地山塊少) • S3 屋清覆土
- S21 潜黃褐色土 (地山塊少) • S2 覆土
- ※地山: 黄褐色粗砂

## S2・3 斧切り方 南北断面

- 1 坎褐色土 (地山塊少)
- 2 潜黃褐色土 (潜褐色土粒少)
- 3 坎褐色土 (潜褐色土色)
- 4 坎褐色土 (地山塊少)
- 5 坎褐色土 (地山塊少, 灰分少沈着) • 硬化, 貼り床
- 6 灰色土 (灰褐色土多, 坎褐色土色, 灰分多沈着)
- 7 黄褐色土 (部分多沈着)
- 8 坎褐色土 (地山塊少)
- 9 黄褐色土 (地山塊少)
- 10 黄褐色土 (地山塊) 地山
- 11 潜黃褐色土 (地山塊多, 黑色土塊少, 幾) • 上層硬化, 貼り床

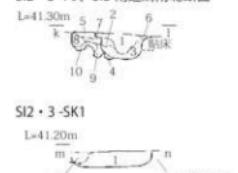
## S2 烧土(炉) 南北断面



## S3 挖り方 東西断面



## S1・2・3-P9、S1・3 南辺溝南北断面



## S1・3-SK1

- L=41.20m
- m n
- 側溝
- 貼り床泥瓦なし
- S2・3-SK1
- 1 潜褐色土 (黑褐色色・地山粒多) • 最下層付近に焼土含む
  - \*地山: 黄褐色シルト～細砂

- 34 坎褐色土 (地山塊・黒褐色土粒並)
- 35 坎褐色土 (地山塊・黒褐色土粒少)
- 36 次褐色土
- 37 次褐色土
- 38 黑褐色土 (黑褐色土粒・地山粒少) • 横溝
- 39 潜黃褐色土 (潜褐色土塊多) • 上層硬化, 貼り床
- 40 坎褐色土 (地山塊少・灰粒少) • 包含層
- 41 坎褐色土 • 古層
- 42 潜黃褐色土 (潜褐色土多)
- 43 黄褐色土 (黄褐色土小塊多, 黑色土小塊少)
- 44 潜黃褐色土 (潜褐色土多)
- 45 底褐色土 (黄褐色土少)
- 46 坎褐色土 (黄褐色土粒並)
- 47 潜黃褐色土 (黑色土小塊上方に少)
- 48 潜黃褐色土 (黑色土多・潜褐色土並) • 根の影響大
- 49 黄褐色土 • 地山塊
- 50 潜黃褐色土 (潜褐色土少・灰分少沈着)
- 51 黄褐色土 • 地山
- 52 潜黃褐色土 (潜褐色土多, 黑褐色土小塊少) • 上層硬化, 貼り床
- 53 底褐色土
- 54 底褐色土 (黄褐色土少・大塊並, 黑褐色土小塊混)
- 55 底褐色土 (黄褐色土多) • 和い土質
- 56 底褐色土 • 和い土質
- 57 潜黃褐色土 (潜褐色土小塊～中塊少)
- 58 潜黃褐色土 (地山塊土多)
- 59 潜褐色土 (潜褐色土小塊～大塊並) • S2・3-P12
- 60 黄褐色土 (地山塊土少) • S2・3-P12
- 61 黄褐色土 • 和い土質
- 62 潜黃褐色土 (地山塊土多)
- 63 次褐色土 (地山塊土粒少)
- 64 坎褐色土 (地山塊土粒少)
- 65 潜黃褐色土 (地山塊土多)
- \*1～4 層は盛土
- \*21～23 層はビット
- \*28～29・38～57・58 層は壁溝

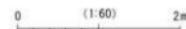
- 12 潜黃褐色土 (褐色土塊小～多, 黑色土塊少)
- 13 潜褐色土 (潜褐色土粒並, 褐色土少, 黑色土塊少)
- 14 坎褐色土 (地山塊土粒少)
- 15 潜褐色土 (地山塊土多)
- 16 潜褐色土 • 15 層よりもやや暗め色調
- 17 潜褐色土 (潜褐色土土多, 黑色土粒並) • S2・3-P13 覆土
- 18 潜褐色土 (地山塊土少) • S2・3-P13 覆土
- 19 坎褐色土 (地山塊土塊少) • S3 屋清覆土
- 20 坎褐色土 (地山塊土粒少)
- 21 潜黃褐色土 (地山塊土多) • S2 覆土

- S2 炉土 (炉) 南北東西断面共通
- 1 潜凹褐色土質
  - 2 底褐色土 (地土・皮炭並) • 上面に燒土塊や多。カマド崩落土か
  - 3 底褐色土 (地山塊多) • 底層か
  - 4 坎褐色土質 (底層土層)
  - 5 潜褐色土質
  - 6 潜褐色土質 (底層土層)
  - 7 底褐色砂質 (黒褐色土粒少) • 上部崩落部
  - 8 潜褐色砂質 (地山塊少) • 地部
- ※1 層: S3 覆土, 2～8 層: S2 覆土

- 4 坎褐色土 (黄褐色土粒並)
- 5 潜褐色土 (潜褐色土多, 黑褐色土少・塊並)
- 6 潜褐色土 (潜褐色土多, 黑褐色土中塊並) • 南北断面の 12 層?

- 7 潜褐色土 (黑褐色土・潜褐色土粒並) • S3 の貼り床か
- 8 坎褐色土 (灰粒少, 地山粒や多)
- 9 にぶい黄褐色シルト (潜褐色土多, 黑褐色土粒並) • 和い土質
- 10 にぶい黄褐色シルト (地山塊少)

\*1-4 層: S2・3-P9・貼り床より新



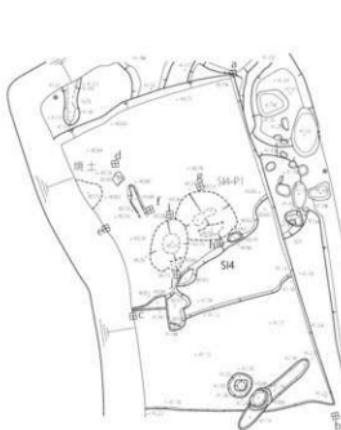
第19図 1区造構図6 (S1・2・3 S=1/60)

## 〔1区 設穴建物〕

SI4



SI4 南北断面

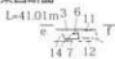


SI4 カマド南北断面

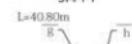


(全体を縮略で図示したピットは床面取り下げ後に複出した直後)

SI4 カマド東西断面



SI4-P1



SI4-P1 西側ピット



SI4 南北断面

- 1 黒褐色土 (下層褐色)
- 2 褐灰色土 (灰色粘土少)
- 3 褐灰色土 (灰色粘土多)
- 4 喀斯特土 (灰色粘土少)
- 5 喀斯特土 (黄褐色土少塊・灰色粘土微)
- 6 黑褐色土 (灰色粘土少)
- 7 黑褐色土 (灰色粘土少塊・黄褐色土中塊少) • 6 層よりも暗色
- 8 喀斯特土 (黄色粘土粒多)
- 9 黑褐色土 (灰白色粘土少・黃褐色土粒並)
- 10 喀斯特土 (にぶく・黄褐色大塊・灰褐色土・黄褐色土粒少)
- 11 にぶく・黄褐色土 (黄褐色土粘土多・黑褐色土粒少・灰褐色土微)
- 12 にぶく・黄褐色土 (黑褐色土小塊少・黄褐色土粒微)
- 13 喀斯特土 (黄褐色土少)
- 14 黑褐色土 (黄褐色土粒並・灰色粘土少・漂白褐色土中塊多)
- 15 黑褐色土 (灰白色粘土少・漂白褐色土粒少)
- 16 黑褐色土 (灰白色粘土・黄褐色土少・炭化物微)
- 17 にぶく・黄褐色土 (黑褐色土中塊少・黄褐色土粒少・小塊多・炭化物微)
- 18 にぶく・黄褐色土 (黑褐色土粒・黄褐色土粒・炭化物微)
- 19 黑褐色土 (地山質土大塊・粘多) • 硬化
- 20 にぶく・黄褐色土 (黑色土大塊・黄褐色土粒少)

21 黄褐色土 (にぶく・黄褐色土多)

22 喀斯特土 (灰褐色粘土少)

23 にぶく・黄褐色土

24 灰黄褐色土 (灰褐色土大塊並)

25 黑褐色土 (灰褐色粘土少)

26 喀斯特土 (黄褐色土粒少)

27 にぶく・黄褐色土 (黄褐色土粒多)

28 喀斯特土 (黄褐色土粒少)

29 にぶく・黄褐色土 (黄褐色土粒少)

30 黄褐色土 (灰褐色土塊) • 脱り床

31 喀斯特土 (黄褐色土粒)

32 漂白褐色土 (漂白褐色土・黑褐色土並)

33 漂白褐色土 (漂白褐色土多・黑褐色土少)

34 黄褐色土 (漂白褐色土並・黑褐色土少)

35 漂白褐色土 (漂白褐色土少)

※6・9・14・19・30層が堅穴屢七か  
※8層があるため確認できないが、も・7層上面が堅穴掘り込み  
面と思われる

※31-35層：掘り方

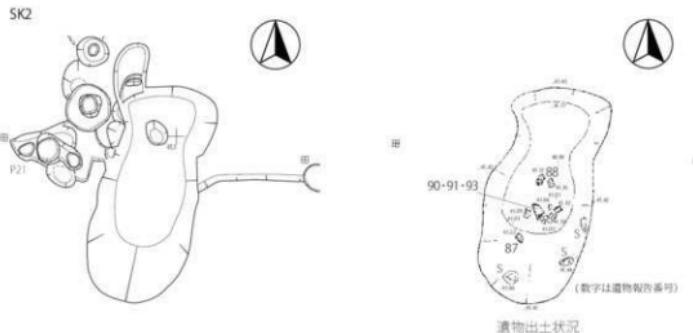
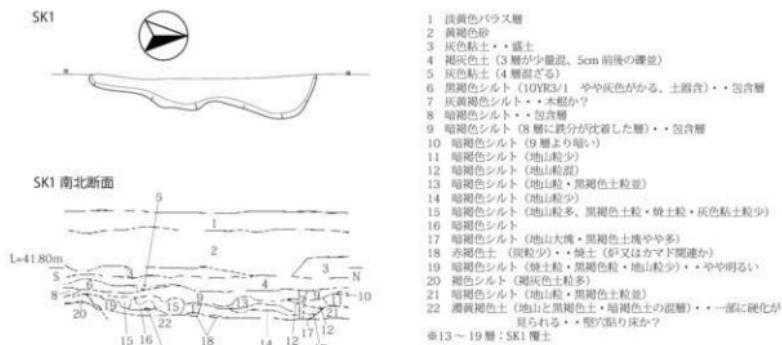
SI4 カマド東西・南北断面共通

- 1 にぶく・黄褐色土 (黑褐色土・燒土塊・漂白並) • カマド天井崩落土
- 2 喀斯特土 (燒土塊やや多)
- 3 赤褐色土 (燒土多・黑褐色土並)
- 4 赤褐色土 (燒土・黑褐色土並) • 漏口付近か
- 5 にぶく・黄褐色土シルト
- 6 喀斯特土 (燒土粒多・地山塊並)
- 7 黑褐色土 (地山土多)
- 8 黄褐色土 (地山土並)
- 9 黄褐色土 (地山土多)
- 10 喀斯特土 (燒土粒・黑褐色土粒並)
- 11 漂白褐色土 (漂白褐色土多) • カマド構築材
- 12 黄褐色土 地山又はカマド構築材
- 13 喀斯特土 (燒土塊やや少) • 漏出し堆積土か?
- 14 赤褐色土 (燒土塊多・黑褐色土塊上面に入る)

0 (1:60) 2m

第20図 1区構造図7 (SI4 S=1/60)

〔1区 土坑〕

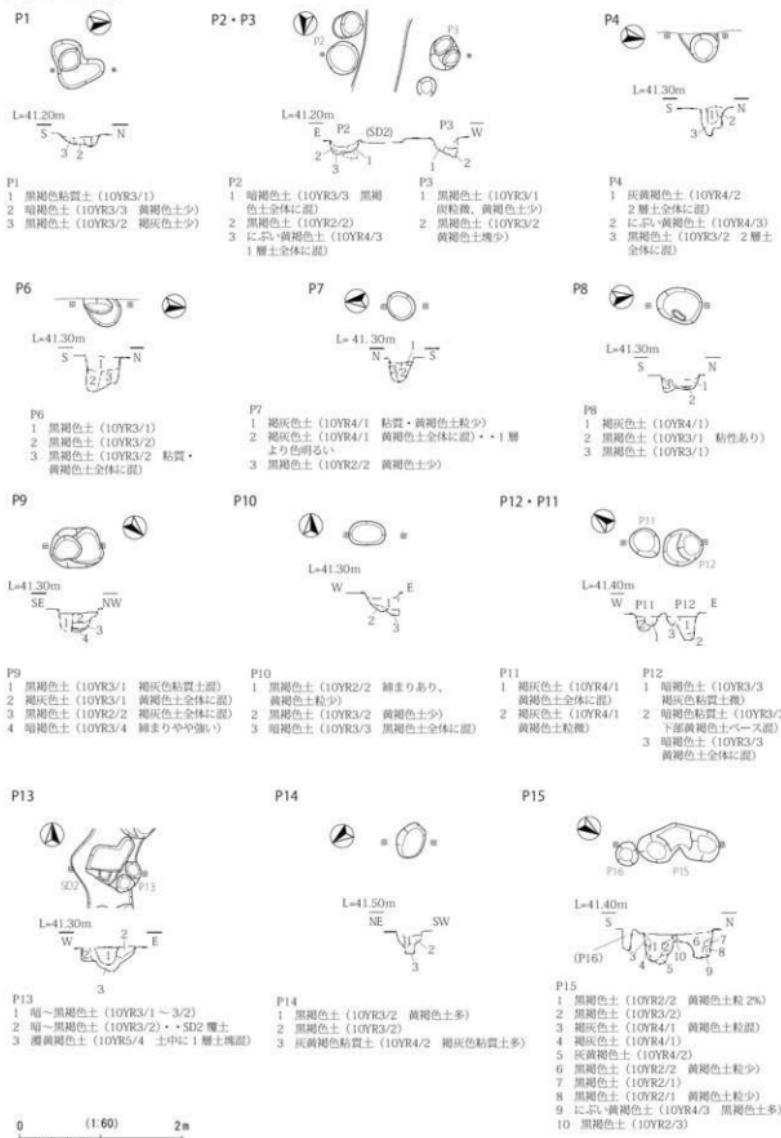


P21・SK2 断面



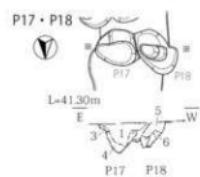
第21図 1区遺構図8 (SK S=1/60)

## [2区 ピット]



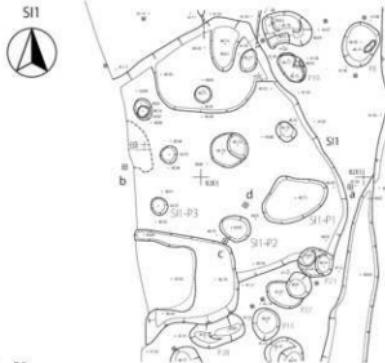
第22図 2区造構図1(ピット S=1/60)

[2区 ピット・堅穴建物・土坑]

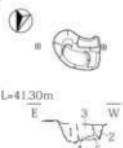


P17・P18

- 1 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 2 黒褐色土 (10YR2/2 黄褐色土多)
  - 3 黒褐色土 (10YR3/2 褐灰色土微)
  - 4 黄褐色土 (10YR3/3 黄褐色土多)
  - 5 黑褐色土 (10YR2/2 黄褐色土少)
  - 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3 黑褐色土少)
  - 7 黑褐色土 (10YR3/2 黄褐色土粘少)
- \*2～4層はP17、5～7層はP18



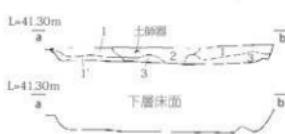
P19



P19

- 1 黑褐色土 (10YR2/2 全体に黄褐色土粒混)
- 2 黑褐色土 (10YR2/2 全体に黄褐色土粒混)
- 3 黄褐色土 (10YR3/3 全体に黄褐色土粒混)
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3 黄褐色土粒混)
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3 黑褐色土全体にまばらに混)

SI1-P2



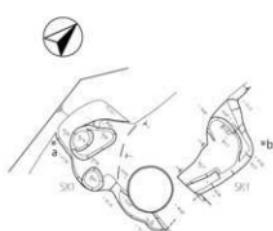
SI1

- 1 黑褐色土 (10YR2/2 土塊片含む、炭粒微)
- 2 黑褐色土 (10YR2/2-2/3 大粒の炭粒含む) • SD1 墓土か?
- 3 褐黃褐色土 (10YR7/4 黑褐色土塊含む、縛まり弱)

SI1-P2

- 1 黑褐色土 (10YR3/2 黄褐色土微)
- 2 黑褐色土 (10YR3/1 粘性あり)
- 3 褐灰色土 (10YR4/1 黄褐色土多)

SK1



SK2



- 1 黑褐色土 (10YR2/2 縛まり弱)
- 2 暗褐色土 (10YR2/3 やや灰色かる、炭粒微、Zでは地山塊わずかに含む)
- 3 暗褐色土 (10YR2/3 粘性あり) • 2層より細潤

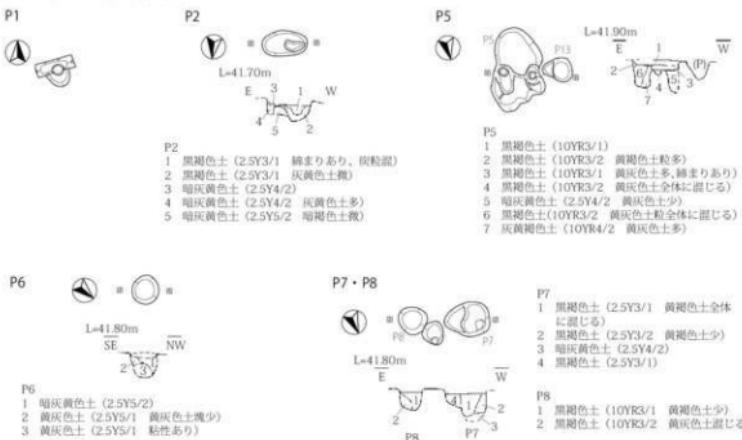
0 (1-60) 2m

第23図 2区造構図2(ピット・SI・SK S=1/60)

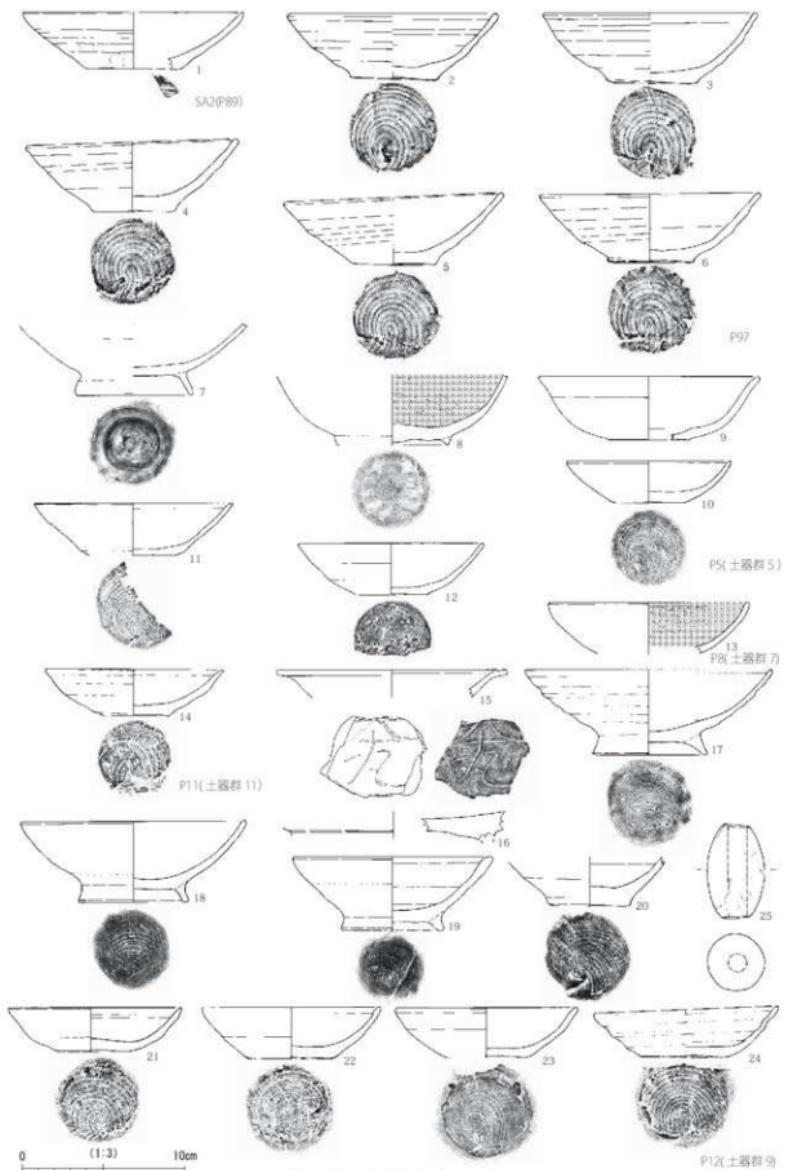
## 〔2区 土坑・溝・その他〕



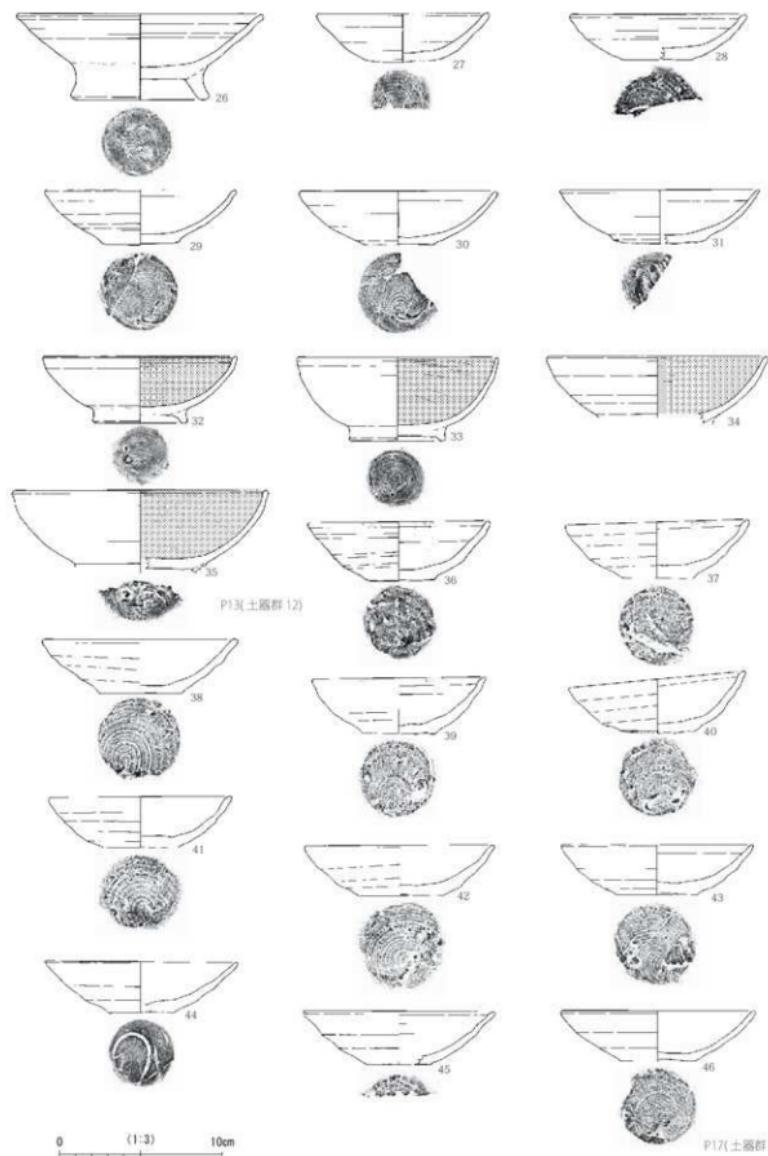
## 〔3区 ピット・溝・その他〕



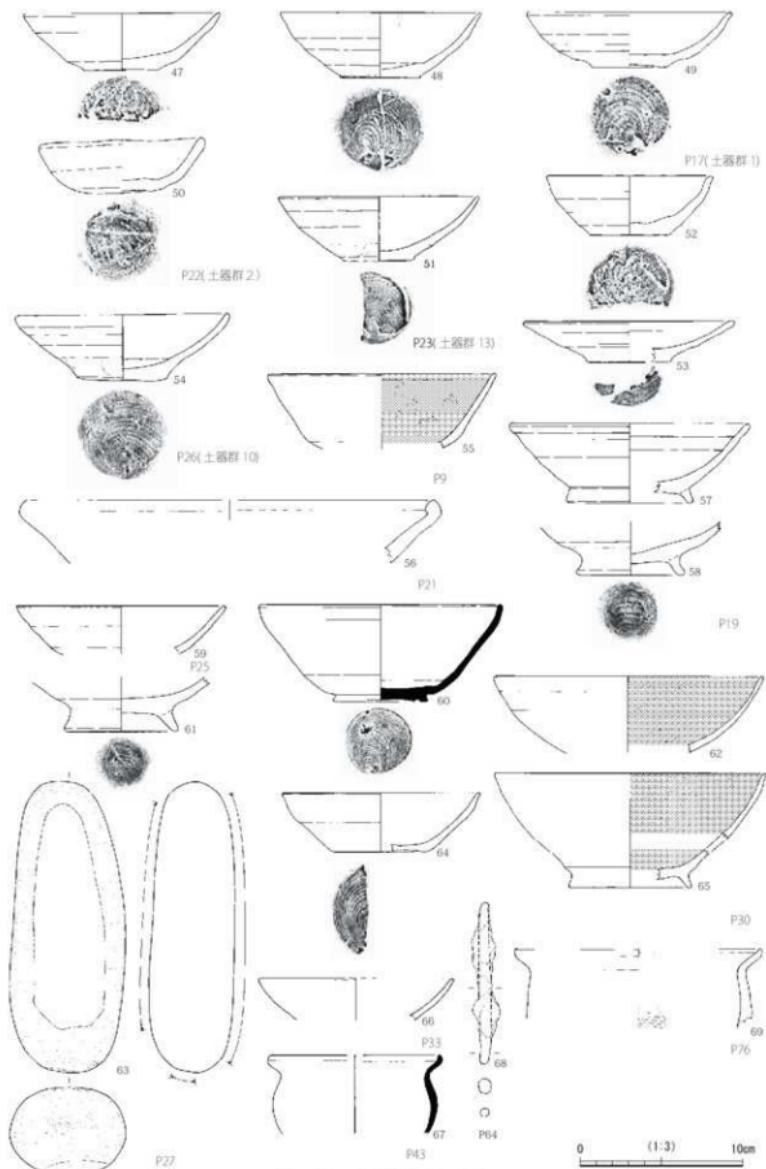
第24図 2区造構図3、3区造構図(SKほか S=1/60)



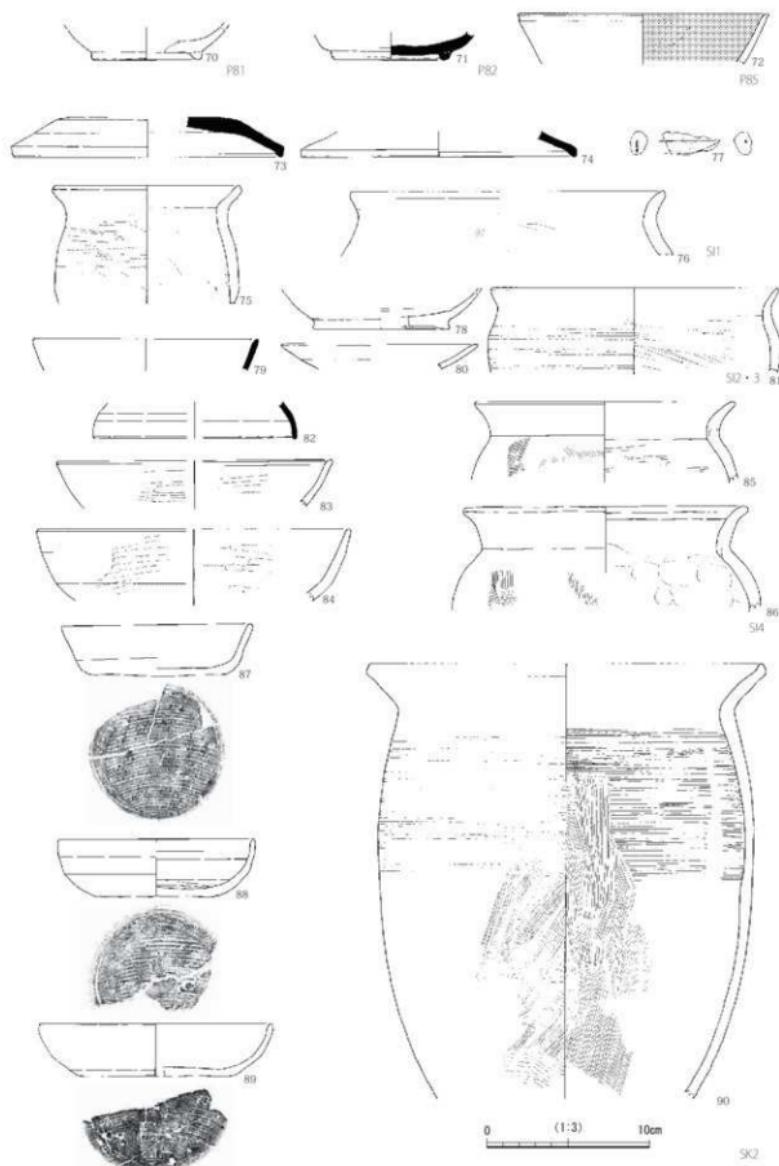
第25図 1区遺物図1 (S=1/3)



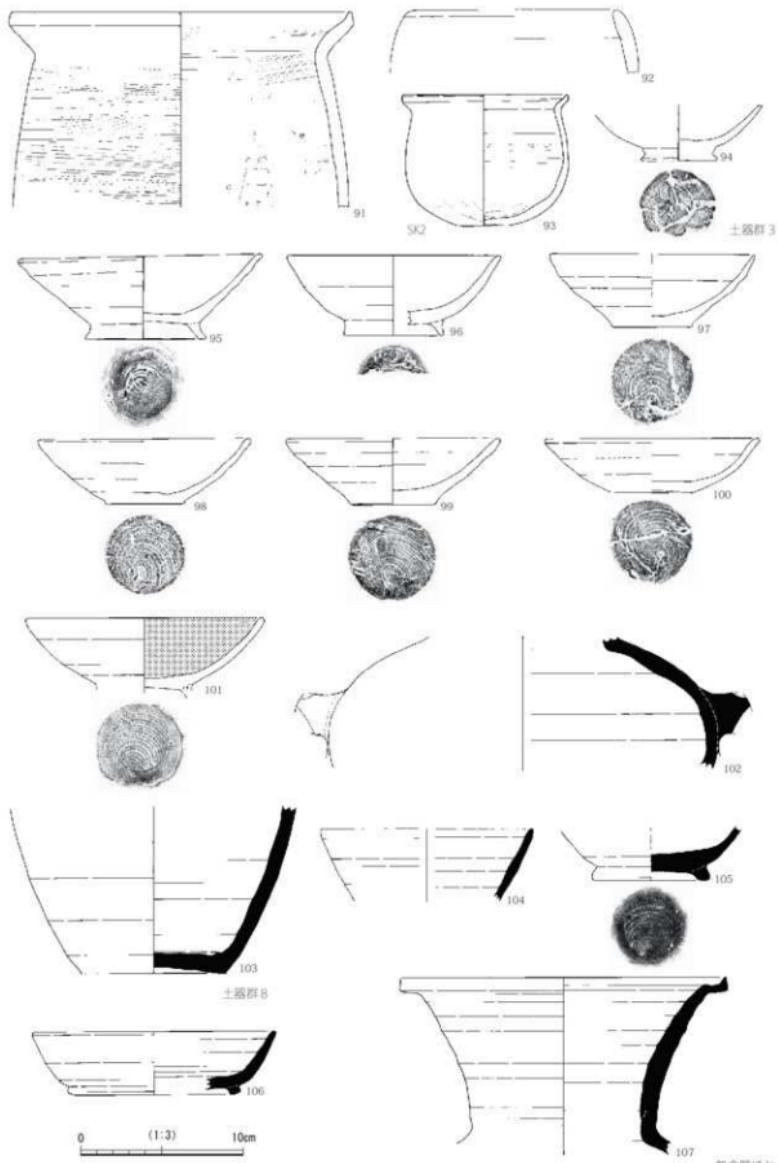
第26図 1区遺物図2 (S=1/3)



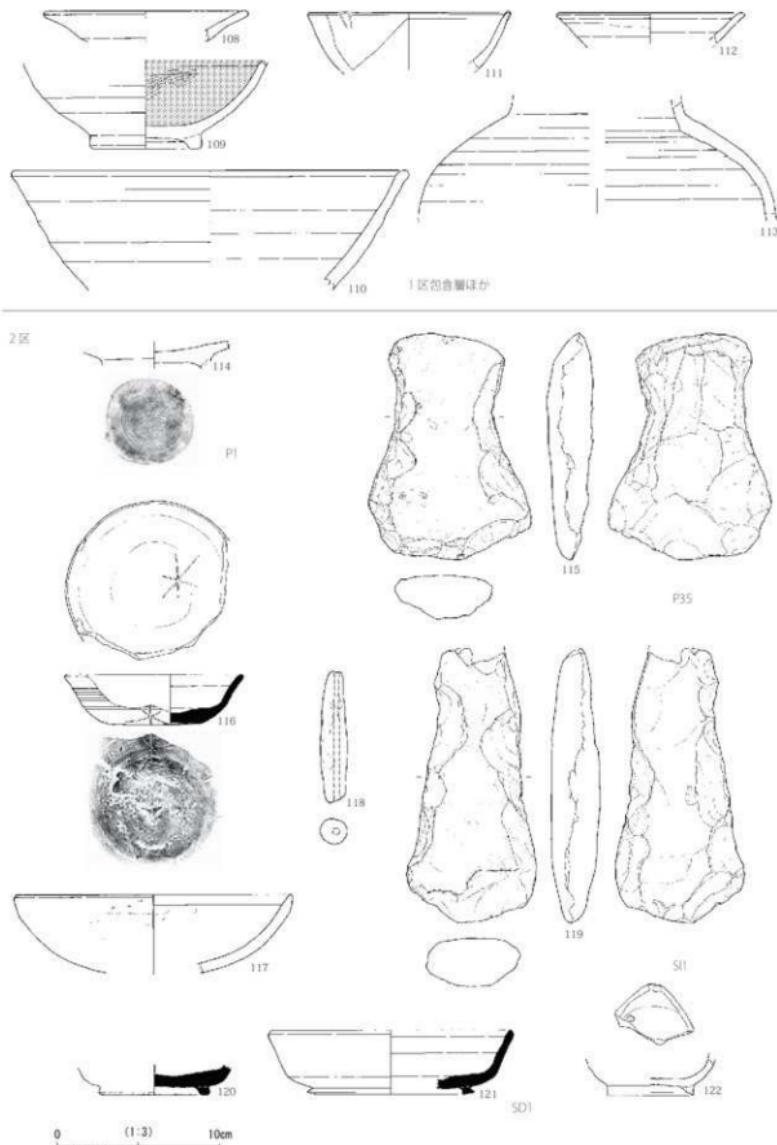
第27図 1区遺物図3 (S=1/3)



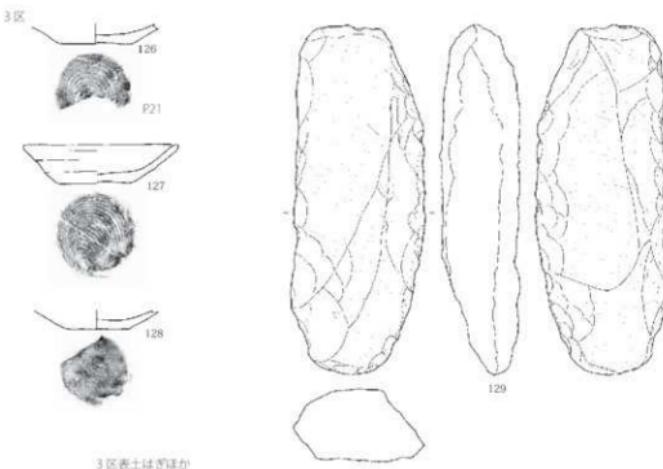
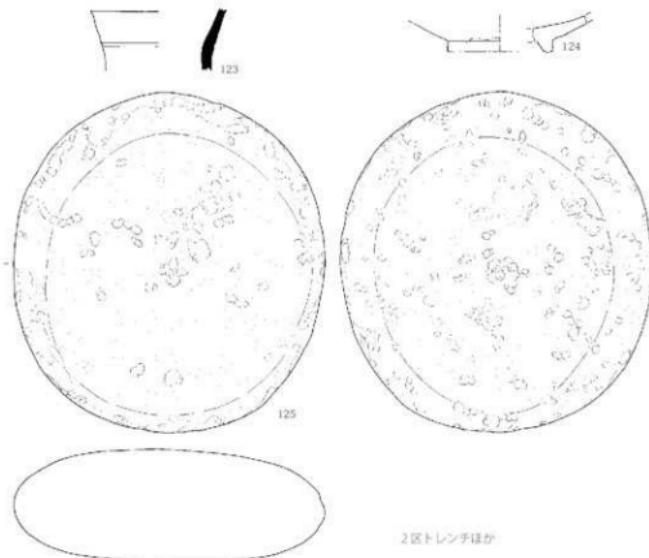
第28図 1区遺物図4 (S=1/3)



第29図 1区遺物図5 (S=1/3)



第30図 1区遺物図6、2区遺物図1 (S=1/3)



0 (1:3) 10cm

第31図 2区遺物図2、3区遺物図(S=1/3)

第1表 土器類解説表

番号	実測 属名	出土地 名	種類	形態	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	底質 (mm)	色調 (内)	色調 (外)	断面	輪郭	加工	備考	
No. 1	U82	1 D1	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.26	54	31	浅黄褐色	淡黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
2	P57	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.27	54	41	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
3	D5	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.29	56	43.5	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
4	D4	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.29	52	44.5	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
5	D2	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.33	52	44.5	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
6	D3	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.34	53	43	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
7	D12	1 P5	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.35	53	45	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
8	D63	1 P5	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	—	68	144	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
9	D92	1 土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.26	42	39	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
10	D62	1 P5	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.02	44	26	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
11	D103	1 P5	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.23	56	32.5	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
12	D101	1 土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.23	45	32	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
13	D102	1 P8	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.24	—	(31.5)	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
14	D58	1 P11	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.10	45	29	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
15	D93	1 土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.40	—	(17)	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
16	黒 1	P12	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	—	—	—	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
17	D60	1 P12	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.53	71	51	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
18	D22	1 土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.37	68	50	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
19	D57	1 土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.19	63	46	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	
20	D100	1 P24	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	—	50	(27)	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
21	D25	1 P2	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.07	46	27	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
22	D25	1 P12	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.10	52	32	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
23	D26	1 P12	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.13	50	32	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
24	D59	1 P12	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.15	54	32	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
25	D23	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.28	55	35	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
26	D21	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.50	80	53	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
27	D65	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.04	48	30	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
28	D68	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.07	43	28	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
29	D57	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.16	47	34	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
30	D66	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.20	44	33	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
31	D69	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.21	57	33	浅黄褐色	浅黄色	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
32	D20	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.18	56	41	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
33	D71	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.22	58	51.5	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
34	D100	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.34	—	(38)	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少
35	D56	1 P13	土器群 1-包 /Agr	土器	有台盤 内里	1.54	—	(51)	黑	黑	口部切削 粗砂少	直壁 粗砂少	粗砂少 直壁 粗砂少	直壁 粗砂少	直壁 粗砂少

番号 No.	実測 測定区 No.	出土地 グリフ (Gr)	種別	基種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	色調 (内) (外)	調査 (内) (外)	測量 (内) (外)	粘土	地成 性状	
26	D17	1	P17 (柱頭)	土器部	楕	110	43	37	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 11.12, 深 12.12 口縁部分海綿層有
27	D6	1	土器群1段上-Na1上 土器群1段下-Na1 土器群1段中-Na1 土器群1段下-Na5上	土器部	楕	111	45	33~37	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 9.12, 深 11.12 口縁部分海綿層有
28	D8	1	土器群1段上-Na3 土器群1段上-Na4 土器群1段上-Na2上 土器群1段下-Na7	土器部	楕	116	50	34	深紅褐色	深紅褐色	0.075"	褐色	口 9.12, 深 11.12 内面にもみがきの付着
29	D10	1	土器群1段上-Na3 土器群1段下-Na4 土器群1段上-Na2上 土器群1段下-Na7	土器部	楕	106	45	33~35	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 11.12, 深 12.12 口縁部分海綿層有
40	D7	1	土器群1段上-Na4 土器群1段下-Na7	土器部	楕	107	45	28~38	褐色	浅黃褐色	0.075"	褐色	口 9.12, 深 11.12 良 完形
41	D9	1	土器群1段上-Na2上 土器群1段下-Na7	土器部	楕	110	45	32	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 9.12, 深 11.12 良 完形
42	D11	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	115	52	29~36	深黃褐色	深黃褐色	0.075"	褐色	口 10.12, 良: 完形 外面部に付着
43	D35	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	116	50	28~31	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 5.12, 深 6.12 良 完形
44	D14	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	117	40	31~38	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 9.12, 深 11.12 良 完形
45	D65	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	117	40	33	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 11.12, 深 12.12 良 完形
46	D81	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	118	46	31	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 4.12, 深 9.12 良 完形
47	D66	1	土器群1段-Na6	土器部	楕	120	47	35	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 4.12, 深 7.12 良 完形
48	D52	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	123	50	40	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 3.12, 深 5.12 良 完形
49	D66	1	土器群1段-Agr	土器部	楕	124	47	34	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 4.12, 深 7.12 良 完形
50	D27	1	土器群2段下-Na7	土器部	楕	99	56	34	深黃褐色	深黃褐色	0.075"	褐色	口 3.12, 深 5.12 良 完形
51	D84	1	土器群2段下-Na7	土器部	無孔楕	123	44	40	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 3.12, 深 5.12 良 完形
52	D83	1	土器群10段-Agr	土器部	楕	101	50	46	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 7.12 良 完形
53	D16	1	P26 (柱頭)	土器部	楕	128	32	25.5	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 5.12, 深 5.12 良 完形
54	D53	1	Agr	土器部	楕	128	35	42	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 7.12 良 完形
55	D61	1	P9	土器部	楕	140	—	46	黑色	黑色	± 0.5"	褐色	口 2.12, 深 7.12 良 完形
56	D23	1	P21 (柱頭)	土器部	楕	120	—	39	深褐色	深褐色	± 0.5"	褐色	口 2.12, 深 7.12 良 完形
57	D54	1	P19 (柱頭)	土器部	楕	146	72	49	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形
58	D94	1	P19 (柱頭)	土器部	楕	146	—	60	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形
59	D66	1	P25 (柱穴)	土器部	楕	129	—	30	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形
60	D15	1	P27 (柱頭)	土器部	有孔楕	148	58	60	灰	灰	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形
61	D97	1	P27 (柱頭)	土器部	有孔楕	—	68	34	浅黃褐色	浅黃褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 3.12 良 完形
62	D55	1	P27 (柱頭)	土器部	内楕	166	—	48	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 3.12 良 完形
63	D47	1	P30 (柱穴)	土器部	内楕	123	36	37	褐色	褐色	0.075"	褐色	口 1.12, 深 4.12 良 完形
65	D48	1	P30 (柱穴)	土器部	内楕	166	75	70	黑色	黑色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形
66	D108	1	P33 (柱穴)	土器部	内楕	119	—	26	深褐色	深褐色	0.075"	褐色	口 2.12, 深 4.12 良 完形

番号 No.	生種 属種	固土地 ヨリト地 (gr)	種類	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	色調 (%)	調査 (%)	測定 (%)	地成 層号
67 D65 1 P43 (柱穴) / 3gr*	馬頭 輪形罐	小型要	有孔器	— (108)	— (49)	灰白	灰	0%*†	0%*†	粗砂、細砂含	良 口-3/12, 黒-欠損
68 D74 1 P76 (柱穴) / 2gr*	馬頭 輪形罐	要	有孔器	— (132)	— (48)	灰白	12.5±黄鐵	3%†	3%†	粗砂、細砂含	良 口-1/12, 黒-欠損
70 D44 1 P91 5gr*	馬頭 輪形罐	要	有孔器	— (68)	— (21)	灰白	12.5±黄鐵	45%*†	45%*†	粗砂、細砂含	良 口-1/12, 黒-欠損
71 D69 1 P91 (柱穴) / 1gr*	馬頭 輪形罐	要	有孔器	— (72)	— (18)	灰白	灰	0%*†	0%*†	粗砂、細砂含	良 口-1/12, 黒-欠損
72 D75 1 P85 5gr*	馬頭 輪形罐	要	有孔器	— (31)	— (35)	灰白	12.5±黄鐵	3%*	3%*	粗砂、細砂含	良 口-1/12, 黒-欠損
73 D42 1 SH1 鹿蹄燒*†	鹿蹄燒	要	—	— (25)	— (25)	灰	灰	0%*†	0%*†	粗砂多	良 口-1/12, 黒-欠損
74 D43 1 SH1 北半幅	鹿蹄燒	要	—	— (16)	— (16)	灰	灰	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 口-2/12, 内外面接觸部 重石塊を含む、一部は灰
75 D41 1 SH1 土器取 3号 No.2	土器器	要	—	— (13)	— (73)	浅黄褐	黄褐	0%*†	0%*†	粗砂多、壤土含	並 口-3/12
76 D90 1 SH1 北半幅	土器器	要	—	— (40)	— (40)	黄褐	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 口-1/12
78 D45 1 S82 3号 P47gr*	鍵桶形器	桿	—	— (84)	— (22)	灰白	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 小片 内外面接觸部を含む、一部は灰
79 D88 1 S83 1面垂さうじ 5gr*	匙垂器	桿	—	— (40)	— (19)	灰白	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 小片 内外面接觸部を含む、一部は灰
80 D89 1 S83 1面垂さうじ 5gr*	匙垂器	桿	—	— (122)	— (65)	灰白	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 小片 内外面接觸部を含む、一部は灰
81 D46 1 S82 3号 P1 / 5gr*	匙垂器	桿	—	— (53)	— (53)	灰白	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 小片 内外面接觸部を含む、一部は灰
82 D49 1 SH1 P1	匙垂器	桿	—	— (23)	— (23)	灰	灰	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 小片 内外面接觸部を含む、一部は灰
83 D91 1 S44 1上唇、S44 1中唇、S44 1下唇	匙垂器	桿	—	— (169)	— (29)	白	白	0%*†	0%*†	粗砂少、粗砂多	良 口-1/12, 内外面接觸部を含む、一部は灰
84 D50 1 S44 1上唇、S44 1中唇、S44 1下唇	匙垂器	桿	—	— (47)	— (47)	赤褐色	赤褐色	0%*†	0%*†	粗砂少、石英含	良 口-1/12, 内外面接觸部を含む、一部は灰
85 D59 1 S44-P1	匙垂器	桿	—	— (50)	— (50)	12.5±黄鐵	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、石英含	良 口-2/12, 内外面接觸部を含む、一部は灰
86 D40 1 S44-P1	匙垂器	桿	—	— (65)	— (65)	黑褐	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、石英含	良 口-2/12, 内外面接觸部を含む、一部は灰
87 D32 1 S82 2号 1/3gr*	土器器	桿	—	— (15.5)	— (80)	33	褐	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-6/12, 黒-9/12
88 D31 1 S82 3号 3gr*	土器器	桿	—	— (19)	— (76.5)	36	褐	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	並 口-3/12, 黒-5/12
89 D88 1 S82 2号 2/3gr*	土器器	桿	—	— (141)	— (94.5)	32.5	褐	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-3/12, 黒-5/12
90 D29 1 S82 3号 3/4gr*	土器器	長柄要	—	— (250)	— (129)	浅黄褐	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-3/12
91 D28-2 1 S82 2号 2/3gr*	土器器	長柄要	—	— (121)	— (206)	灰白	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-3/12
92 D67 1 S82 1号 3gr*	土器器	桿	—	— (21.5)	— (39)	灰白	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-1/12
93 D30 1 S82 2号 2/3gr*	土器器	桿	—	— (10.5)	— (25.5)	81	褐	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	並 口-3/12, 黒-5/12
94 D37 1 土器群 3号 4gr*	土器器	桿	—	— (35)	— (46)	12.5±黄鐵	灰白	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-10/12
95 D77 1 4gr* 土器群 8号 8周邊	土器器	有孔桿	—	— (130)	— (60)	50	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-7/12, 黒-5/12
96 D12 1 土器群 8号 8周邊 3号 / 4gr*	土器器	有孔桿	—	— (148)	— (50)	45	浅黄褐	12.5±黄鐵	0%*†	粗砂少	良 口-9/12, 黒-9/12
97 D80 1 土器群 8号 8周邊	土器器	桿	—	— (128)	— (41)	50	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-4/12, 黒-5/12
98 D18 1 土器群 8号 8周邊	土器器	桿	—	— (130)	— (53)	41	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-8/12, 黒-11/12
99 D79 1 4gr* 土器群 8号 8周邊	土器器	桿	—	— (130)	— (50)	32~34	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-6/12, 黒-完粘
100 D13 1 土器群 8号 8周邊 3号 / 4gr*	土器器	桿	—	— (130)	— (50)	32~34	12.5±黄鐵	0%*†	0%*†	粗砂少、壤土含	良 口-6/12, 黒-完粘

番号	実測	調査区	施工地	種別	形質	寸法 (mm)	直径 (mm)	色調 (%)	隔壁 (%)	調整 (%)	施工	施成	備考	
No.	No.													
101	D19	1	土基群 8 号 - 地	橋脚	有台桿 内里	144	—	[51] 黒	[51] 黒・緑	[0.0%]	粗筋多、海綿骨材含	良	口・1/12	
102	D105	1	土基群 8 号下側、通 路側出 - 4kr. 基盤	脚部器 足耳板	—	—	[80] 灰	灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少	小片 外側陥灰		
103	D76	1	土基群 8 号下側 - 通 路側出	脚部器 足耳板	—	90	[103] 灰	灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少	底・3/12		
104	D106	1	通路側出 - 4kr.	脚部器	桿	[139]	—	[45] 灰白	灰白	[0.0%]	粗筋少、海綿骨材含	不良	口・1/12	
105	D70	1	表土 - 8号	脚部器	桿	—	[72] 灰白	灰白	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、石英含	良	口・1/12、底・12/12	
106	D107	1	包 - 4kr.	脚部器	有台桿	148	106	灰白	灰	[0.0%]	粗筋多、石英含	良	口・1/12、底・3/12	
107	D38	1	表土 - 8号	脚部器	桿	200	—	[109] 灰	灰	[0.0%]	粗筋少、白色細粒少、石英含	良	口・1/12	
108	D104	1	包 - 4kr.	土脚器	圓	119	80	[19] 灰	鐵	專用の為調整不要の丸棒物を用意 明顯	細筋多、赤色粒・石英含	良	口・1/12、底・11/12	
109	D78	1	包 - 4kr.	土脚器	有台桿 内里	—	[69]	[55] 里	[55] 外	[0.0%]	細筋多、赤色粒・石英・海綿骨材含	良	口・1/12、底・12/12	
110	D51	1	包 - 4kr.	土脚器	無	[240]	—	[74] [251] 地	地	[0.0%]	細筋少、赤色粒・海綿骨材含	良	口・1/12、外側234番	
111	D34	1	包 - 4kr.	舷脚陶器	陶	122	—	[35] 地	地	[0.0%]	細筋少か、石英含	良	口・1/12	
112	D64	1	包 - 4kr. 包 - 4kr. (SNC2アサヒ - 4kr.)	舷脚陶器	里	110	—	[19] 地	地	[0.0%]	細筋少、石英含	良	口・1/12	
113	D33	1	包 - 4kr.	舷脚陶器	里	—	[69]	[68] 地	[68] 地	[0.0%]	細筋少、石英含	良	口・1/12	
114	D19	2	C2 P1	土脚器	有台桿	—	—	[15] 灰白	[15] 黑灰 - 地灰 - 黄	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、赤色粒・石英含	良	底・12/12
116	黒2	2	C2 S1	脚部器	無台桿	108	52	地灰	地灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、長石・海綿骨材含	良	口・1/12
117	D111	2	C2 S1	土脚器	桿	169	—	[48.5] 淡黄 - 黄灰	[—] 淡黄	[3.0%]	[5.0%]	粗筋多、海綿骨材含	良	口・1/12
118	D12	2	C2 S1	土脚器	土脚	81	17	[155] 地	[155] 黑灰	[0.0%]	[0.0%]	細筋少、赤色粒含	良	重量 17.5kg、孔径 35mm
120	D116	2	C3 SD1	脚部器	有台桿	—	61	[19] 灰	灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、長石含	良	底・3/12
121	D117	2	C3 SD1	脚部器	有台桿	146	103	40	灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋含ま	良	口・1/12、底・3/12
122	D115	2	C3 SD1 内	舷脚陶器	圓	—	52	[21] 金	[21] 金	[0.0%]	粗筋少	口・1/12		
123	D113	2	C3 SD1 内	舷脚陶器	脚部器	—	—	[38] 地	[49] 黑	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少	内・外側陥灰、灰粒少	
124	D114	2	C3 SD1 内	舷脚陶器	白鉛板	—	65	[22] 地	[44] 黑	[0.0%]	灰色粒	良	白色粒且細少	
126	D118	3	C3 B21	脚部器	白鉛板	—	46	[13] 地	[26] 黃	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少切刃	底・4/12	
127	D20	3	表土除去	脚部器	白鉛板	93	47	[24] 地	[25] 灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、赤色粒・海綿骨材含	底・4/12、底・完形	
128	D110	3	表土除去	脚部器	白鉛板	—	41	[12] 地	[24] 灰	[0.0%]	[0.0%]	粗筋少、赤色粒、海綿骨材含	底・4/12、底・完形	

( ) は残存箇

第2表 石・金属製品断続表

番号	実測	調査区	出土地	表面	種別	形質	寸法 (mm)	直径 (mm)	最大長 (mm)	最大厚 (mm)	重さ (kg)	備考
123	D11	1	227-A1	764	鐵力	赤銹斑	180	72	53	17	124.7	
124	D114	2	C3 B21	764	鐵力	赤銹斑	100	18	34	3	15	
125	D115	2	C3 S1	764	鐵力	赤銹斑	9	140	100	285	4.1	
126	D116	2	C3 S1	764	鐵力	赤銹斑	169	100	20.5	439	408.9	
127	D117	2	C3 S1	764	鐵力	赤銹斑	210	192	69	4200		
128	D118	3	C3 B21	764	鐵力	赤銹斑	216	83	50	1231		

## 第4章 総括

1区で調査された河川跡から、現在では本遺跡を右左岸に分割する高橋川は、古代の段階では1区東側に流路をとっていた可能性を指摘でき、左岸に一体的に立地していたと推定して考察を進める。

本遺跡では、2区で条痕文を持つ土器片や、弥生時代以前に遡る可能性のある打製石斧などの出土が確認されたが、明確な遺構が確認されるのは7世紀前半以降である。本遺跡の初現期に当たるこの時期には1SI4のみを確認し、やや遅る7世紀後半になると2SI1と2SK1・2PI5などが掘削されるが、遺物の出土量が僅少であることから判断すると、散発的に遺構が存在した程度の集落とみられる。これらの遺構は2区北半、及び1区北端で確認されていることから、調査範囲の北西側に展開していたと推定される。この時期は、当遺跡周辺の手取川扇状地帯央部の開発が本格化する時期に一致しており、本遺跡の発生契機も扇央部の開発着手に端を発すると考えるのが妥当であろう。

8世紀前半には1SI1が確認され、1SI2はハケ調整を施された土師器壺片を本遺構の遺物として積極的に評価するならば、8世紀中葉までに収まる遺構と考える。1SI3は9世紀後半に遡る可能性がある遺物が床面から出土しているが、一定の規模を保ち、整った方形を呈する平面形態、掘立柱建物に切られている点、1SI2と方向軸が類似する点などからすれば、そこまで遡る可能性は低いと考える。近隣に位置する上林・新庄遺跡群では8世紀中葉～末葉に堅穴住居が掘立柱建物に建て替えられ、9世紀まで残る堅穴建物は矮小化が進み平面形も不正形になる流れが明らかになっており(横山 2000)、1SI3より主軸をやや西よりに振るだけの1SA1はおそらく1SI3からさほど時期を置かずに建て替えられた掘立柱建物の柱列の可能性が高い。明確に時期を示す出土遺物はないが、周辺動向に照らせば遡くとも9世紀前葉頃までには位置付けられるのではないかと推定する。その考えが許されるならば1SI2より新しい1SI3は8世紀中葉～9世紀初頭頃に位置付けるべき遺構となり、床面出土遺物は切り合う他遺構からの混入と考える必要が生じる。掘立柱建物については、明確に方形を志向する柱穴を持つ柱列はこの1SA1のみであるが、復元案を提示するまでには確信の持てなかった1～2間程度の同軸の柱列が他にも複数確認されることから、近接時期の掘立柱建物が数棟は存在していたと見込まれる。また、これらよりやや南側に位置する、須恵器模倣の特殊な土師器が出土したISK2もこの時期に当たる。該期に帰属する遺構は1区3～6区で確認された他、区画溝とみられる2SD2が挙げられ、3区以西を除くエリアを中心に展開していた可能性があるが、遺物量の少なさからすると、それほど大規模に集落が展開していた様子は見られない。

その後は空白期間を挟み、10世紀半ば以降に急激な遺構・遺物の増加が確認される。遺物の時期については後述するが、一部で須恵器が共伴するものの、基本的には須恵器生産終了後の時期が主体であり、わずかな国産施釉陶器を共伴しつつ、ほぼ土師器で占められる田嶋編年Ⅶ期に相当する。この時期、1区4・5区では包含層から多量の土器が出土し、土師器埋納遺構などが検出されている。1SB1や1SA2もこの時期に帰属する可能性が高い。祭祀的な埋納行為とみられるIP97とIP17やIP12が近接地にあることから、付近に本遺跡の中核的な建物、或いは建物群が存在したことも想定されよう。この時期の中心地は1区を主体として3区を含めた遺跡南東部と言える。

本遺跡で10世紀半ば以降に集落が再編される事実は、9世紀中頃～末にかけて急速に衰退してほぼ終焉を迎える上林・新庄遺跡群とは動向を異にする。本遺跡も大きくは上林・新庄遺跡群に包括される集落と思われるものの、それらが木呂川水系の左岸を中心に立地するのに対し、同じ富樫用水系でも高橋川水系に立地する点で異なり、やや地点も離れることからこの点、検討を要する。本遺跡の約

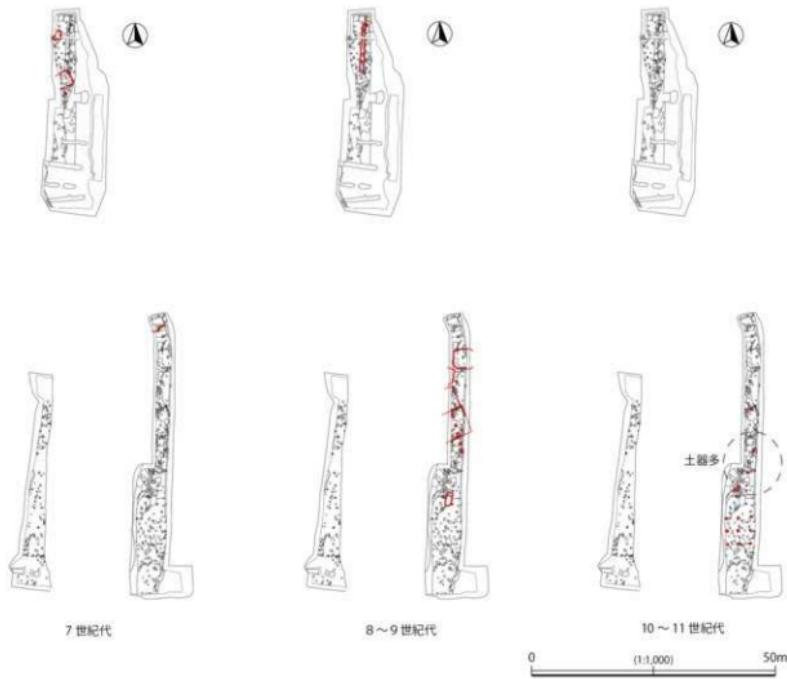
300m上流部に所在する新庄カキノキダ遺跡が平成26、27年度に調査されており、本遺跡と同様に10世紀代に位置づけられる遺物が出土していることから、上林・新庄遺跡群に同一視するよりも、高橋川左岸の島状地形に立地する別の遺跡群として捉えた方がよいのかもしれない。掘立柱建物などの遺構の様相が分からぬことからこれ以上の推認は差し控えるが、1区ではわずか20mに満たない範囲から縄釉陶器3点、灰釉陶器1点が出土している点や、特注品とみられる線刻土器が出土している点などは評価してよく、出土遺物の時期や土師器の一括出土など、同じく扇央部に位置する安養寺遺跡群や三浦遺跡群などとの共通性が指摘されることから、平安時代後半に新たに再編された扇状地再開発の拠点的集落として本遺跡を評価することが可能ではなかろうか。

次に土師器の詳細な年代観について検討したい。田嶋編年Ⅶ期を中心とした土師器が多く出土しているが、この時期の土師器は単体としての出土品では時期を押さえにくく、一括資料の組成や法量分布、或いは国産陶器の共伴などによって時期を求めることが多い。本遺跡では多量の一括出土資料はないが、いくつかまとめて出土した土師器があることから、まずはそれらの時期を導き出し、他の出土遺物の時期もそれを基点として類推したい。一括出土遺物として挙げられるのはIP97、IP12、IP13、及びIP17である。IP97は土師器椀5枚の埋納遺構で、口径12.7～13.4cm、底径5.2～5.6cm、器高4.1～4.45cmで法量的にもまとまった資料である。口径はさほど大きくないが、一定の高さを持ち、底径も大きめである特徴から田嶋編年Ⅶ<sub>1</sub>期とみておきたい。IP12は図示した以外にも極少量の内黒有台椀が出土している。有台椀には法量にばらつきがあるが、無台椀は口径10.7～11.5cm、底径4.6～5.4cm、器高2.7～3.2cmでまとまっている。器高3.5cm程度のやや深身の椀も出土しているが、それらにしても口径は12cm以下で縮小傾向は明らかである。法量、形態的には三浦・幸明遺跡Ⅲ区SK7や安養寺遺跡群柴木Pit72出土資料に類似することから田嶋編年Ⅶ<sub>2</sub>新期(出越編年Ⅲ2期)に位置付けられると考えたい。IP13はIP12に様相は似るが、口径10cm代の小型椀に加えて口径約12cmの製品があり、大小が確認される。また内黒有台椀も体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部をやや内湾気味に収める形態は共通するが、口径11.8～15.4cmとばらつきがあり、法量が三分化していることが窺われる。三浦・幸明遺跡Ⅲ区SK7に類似することからIP12同様、田嶋編年Ⅶ<sub>2</sub>新期(出越編年Ⅲ2期)と判断する。残るIP17は、口径に比して器高の高い第26図36、37、39、40、48などの深身のタイプと、他の浅いタイプがあり、前者は口径10.6～12.3cm、後者は口径が11.0～12.4cmの範囲に集中する。IP97出土資料に比べると小型化が明らかに進んでいるが、形態からするとIP12・13出土の小型椀よりも椀らしい形態を保っていることからその間に位置付けられる資料とみられる。口径10～11cmの小型椀が定量化する金沢市額谷カネカヤブ遺跡SK02との類似性を認めることから田嶋編年Ⅶ<sub>2</sub>新期でも古い時期に当たる出越編年Ⅲ1期に位置付けられると判断する。IP8、IP11も田嶋編年Ⅶ<sub>2</sub>新期に位置づけられよう。他に田嶋編年Ⅵ<sub>3</sub>期とみられる須恵器椀を伴うIP27や、同中世I-1期に位置付けられる菊花状搔き出し高台の内黒椀と小皿が出土したIP5などが確認されるが、1区の他のビットは概ね同Ⅶ<sub>2</sub>新期を中心とした時期に位置付けて大過ないだろう。再編された集落の存続期間は田嶋編年Ⅵ<sub>3</sub>～中世I-1期と言える。多量の土器が出土した1区で白磁が共伴しないが、報文中で低い柱状高台風と表現した第29図94と同じ造作の製品が極少量出土しており、これを柱状高台のはしりと考えても、やはり田嶋編年中世I-1期でも前半代までに収まるだろう。なお、2区の旧流路から白磁が出土していることから、やや降る時期まで遺跡が存続していた可能性はある。

最後に土師器埋納遺構について検討を加える。土師器の一括埋納については、出越茂和氏や前田清彦氏の論考があり、両者とも土師器埋納遺構を出土土師器の多寡、出土遺構の形態、検出場所等から、集落全体への祭祀、建物群への祭祀、個別建物への祭祀などに分類する(出越1991、前田1996)。それ

に倣えば、本遺跡の1P12・17は前田氏の言うB或いはC型、1P97はC型に相当するものと見込まれる。建物との位置関係は明確ではないが、1P12・17は確認された柱痕跡から柱穴であったと判断され、抜き取り後に入れられた土器群と見做されることから、個別建物の廃棄儀礼に伴うことが想定される。1P12は線刻文字を持つ土師器を使用した儀礼、1P17は稲穂を入れた土器を供え、灯明を焚いた儀礼が執り行われたと想定される。「本」の文字が書かれた土器については柱穴から出土する事例が多いことから地鎮関連に関わるとの見解があり、県内では金沢市千木ヤシキダ遺跡SX25からは外底部に「本(本の異体字)」と墨書きされた土師器碗4枚と判読不明の墨書きを持つ土師器碗1枚の計5枚が皇朝鏡6枚と共に出土している。平川南氏は「奉」の墨書きが出土する遺跡出土の「本」墨書きについては「奉」と同一の意味で使用された可能性があると指摘しており(平川2000)、荒井秀規氏も墨書き土器を考察する中で「本」を「奉」の略体と考え、「本」と墨書きされた土器は「奉獻土器」として考察対象とする必要性を論じている(荒木2005)。「奉」とは共伴しないものの、千木ヤシキダ遺跡出土の「本」を「奉」と置き換えてみることができるならば、まさしく土地神に捧げられた土器に相応しい文字と理解できる。墨書きとは異なるが、「凡」と刻書された土器も同様に理解しうるのではないか。また、このように土師器内底面に文字を刻書する事例は県内では本遺跡の他、白山市横江莊遺跡で1点、白山市橋爪ガノアナ遺跡で2点、白山市三浦・幸明遺跡で3点報告されている。横江莊遺跡は下限が田嶋編年Ⅶ<sub>2</sub>古期、橋爪ガノアナ遺跡は同中世I~I期、三浦・幸明遺跡は同Ⅷ<sub>2</sub>新期に位置付けられており、概ね似通った時期である。横江莊遺跡を除くと、いずれも本遺跡と同じ手取川扇状地扇尖部に立地する遺跡であり、10世紀後半~11世紀代にかけての扇状地再開発に関わった開発領主層クラスの居住地と理解されている。県内ではこの4遺跡以外には類例が知られないが、島根県でも12世紀代に特徴的な事例であると報告されており、古代末の祭祀アイテムとして、内底面に刻書した土師器供膳具が使用される儀礼が一部で採用されていたものであろう。1P97は柱痕と考えるには浅いことからそれらとは性格を異にすると判断できるが、出土土師器碗が5枚であったことに注目したい。広義の地鎮儀礼に伴い、東西南北に中央を加えた五方への鎮物を埋納することはよく知られたことであるし、密教では五宝、五穀、五薬、五香などの宝物を埋める作法も知られるところから、先の千木ヤシキダ遺跡SX25を含め、出土点数が5枚であることは偶然ではなく五を意識したが故のことと考える。出土状況は五方に沿って埋められた状況にはないが、5枚のうち3枚に灯明痕が付着する事実を鑑みると、宝物を盛ったものではなく、五方への灯明が捧げられた後に埋納された遺構と推定したい。それが肯定されるならば、1P97は1P12・17とは異なり、建物の建設前に執り行われた地鎮儀礼に伴うものとの理解が可能である。出土土師器の年代観からも、そのような理解に矛盾は生じない。

以上、簡単ではあるがまとめると、本遺跡は手取川扇状地の開発着手に伴って7世紀前半に小規模集落が形成され、9世紀代に一旦終息するが、その後手取川扇状地再開発に伴い、10世紀半ば~11世紀半ば頃にかけて再び集落が形成される。この間、遺跡の中心は北西部から南東部へ徐々に移動していることが明らかとなった。本遺跡の中心時期は最も多量の遺物が出土した10世紀半ば~11世紀半ば頃であり、その時期の住人は国産陶器をある程度保有し、土器祭祀を執行し得る人々であることから、再開発を担う拠点的集落の一つとして評価しておきたい。



注

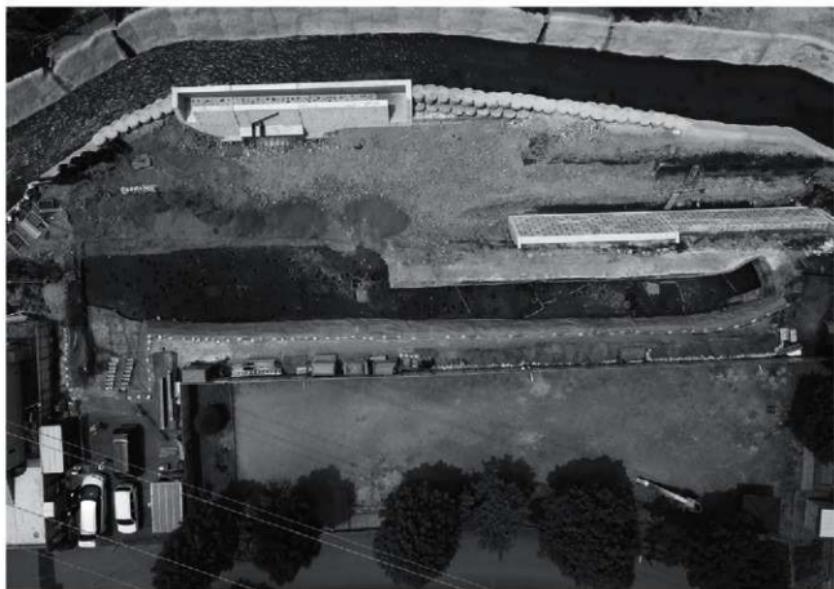
(1) 森 公章氏に転載いただいた。

## 引用・参考文献

- 荒木秀規 2005 「神に捧げられた土器」『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館
- 石川県野々市町 2006 『野々市町史 通史編』
- 石川県野々市町 2002 『野々市町史 資料編1』
- 島根県古代文化センター 2003 『島根県古代文化センター調査研究報告書14 山陰古代出土文字資料集成I (出雲・石見・隱岐)』
- 田嶋明人 2013 「第1節 平安期土器の歴年代と横江莊遺跡の変遷」「加賀・横江莊遺跡 観測内容確認調査発掘調査報告書」白山市・白山市教育委員会
- 出越茂和 1991 『金沢市千木ヤシキダ遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合
- 出越茂和 1997 『北陸古代後半における碗皿食器(後)』『北陸古代土器研究 第7号』北陸古代土器研究会
- 平川 南 2000 『墨書き土器の研究』吉川弘文館
- 前田清彦 1996 『松任市三浦・幸明遺跡 松任市三浦・幸明地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』松任市教育委員会・松任市三浦・幸明地区土地区画整理事業組合
- 横山貴広 2000 『上新庄遺跡 上林古墳 上林テラダ遺跡 下新庄タナカダ遺跡』野々市町南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ 石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理事業組合
- 吉岡康暢 2009 「第V章 総括 第3節 末松庵寺をめぐる問題」「史跡 末松庵寺跡」文化庁



遠景(南から)



俯瞰

図版2 (1区造構2)



完掘状況(北から)



完掘状況(南から)



S12・3完掘状況(北東から)



調査前風景(北西から)



表土除去作業(北から)



表土除去状況(南から)



造構検出作業(南から)

図版4 (1区遺構4)



SI1 棟出状況(北西から)



3、4区遺構検出状況(南から)



2、3区遺構検出状況(北から)



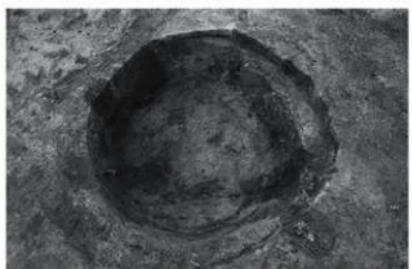
1区南壁土層断面(北から)



P97 挖削作業(北東から)



P97 遺物出土状況(南から)



P97 完掘状況(南から)



P5 土層断面(北から)



P8(土器群7)遺物出土状況(北から)



P11(土器群11)遺物出土状況(北から)



P11土層断面(南から)



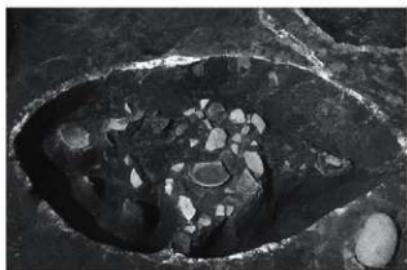
P12遺物出土状況(南から)



P12線刻土器出土状況(北から)



P13(土器群12下層)遺物出土状況(南から)



P13遺物出土状況(南から)



P17(土器群1上層)遺物出土状況(西から)

図版6 (1区遺構6)



P17(土器群1下層)遺物出土状況(東から)



P23(土器群13)遺物出土状況(南から)



P26(土器群10)遺物出土状況(南から)



P25遺物出土状況(南から)



P27遺物出土状況(南西から)



P81遺物出土状況(南から)



P82遺物出土状況(東から)



S11実掘状況(西から)



SI2カマド南北土層断面(東から)



SI3西壁土層断面(東から)



SI3床面検出状況(南から)



SI2・3-SK1土層断面(北から)



SI2・3-P9土層断面(北東から)



SI3掘方土層断面(東から)



SI4南北土層断面(南西から)



SI4床面検出状況(南から)

図版8 (1区遺構8)



SI4 カマド検出状況(東から)



SI4 挖方南北土層断面(西から)



SI4 床面検出ピット完掘状況(南から)



SK1 完掘状況(東から)



SK2 遺物出土状況(東から)



SK2 完掘状況(東から)



SD1 ~ 3 完掘状況(南から)



土器群8 最下層遺物出土状況



遠景(北から)



俯瞰

図版 10 (2区遺構 2)



表土除去状況(南から)



遺構検出作業(南から)



遺構検出状況(北から)



西壁②土層断面(北東から)



西壁③土層断面(東から)



トレンチ1(北から)



トレンチ4(南東から)



P4土層断面(東から)



P9 土層断面(北東から)



P11 土層断面(西から)



P12 土層断面(西から)



P19 土層断面(北から)



SI1 遺物出土状況(北東から)



SI1 土層断面(北東から)



SI1 遺物出土状況(南西から)



SK2 土層断面(北から)

図版 12 (3 区造構 1)



遠景(北から)



俯瞰

図版 13 (3区造構 2)



調査前風景(北から)



造構検出状況(北から)



西壁②土層断面(東から)



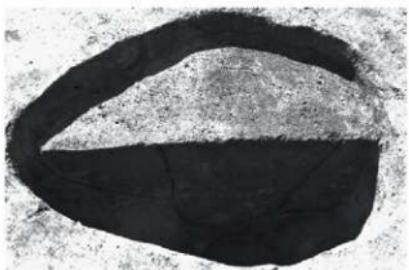
西壁④土層断面(東から)



P2土層断面(北から)



P5土層断面(北から)

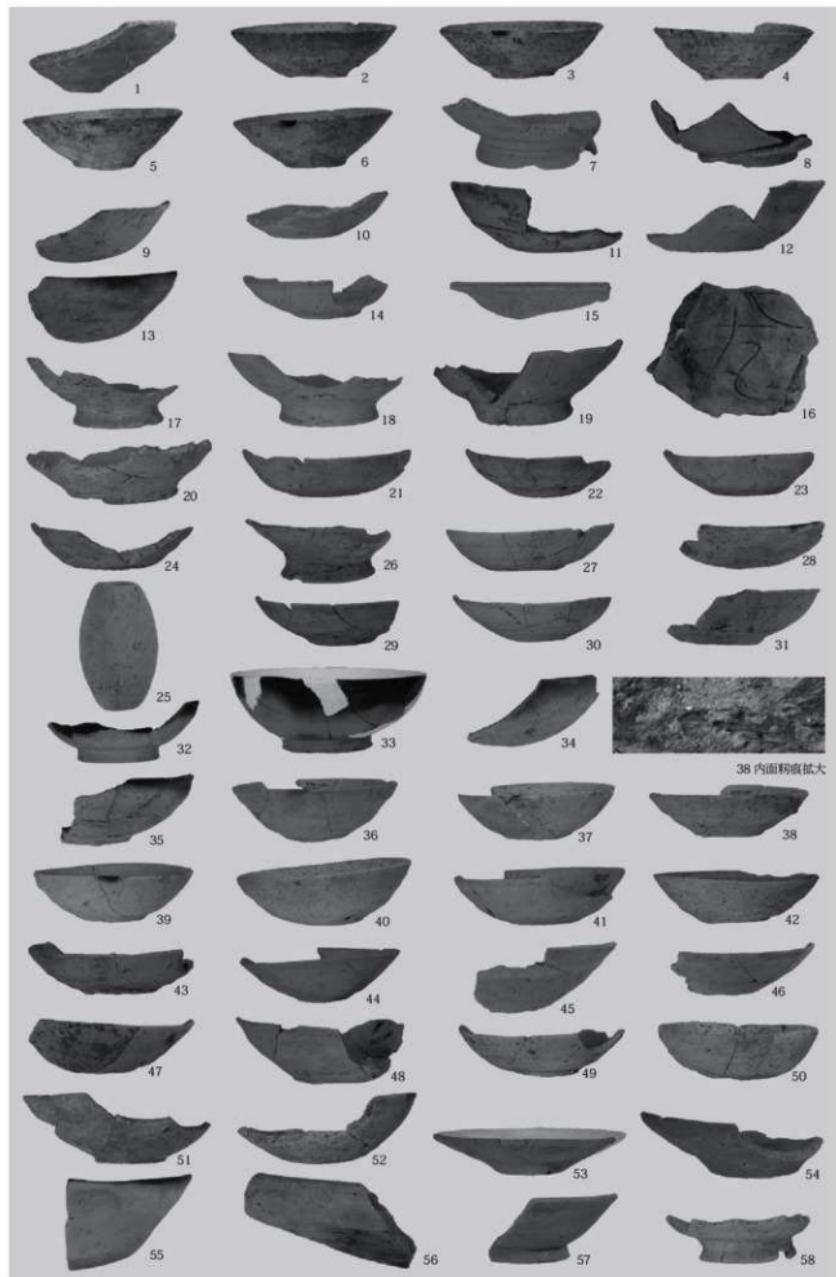


P7土層断面(北から)

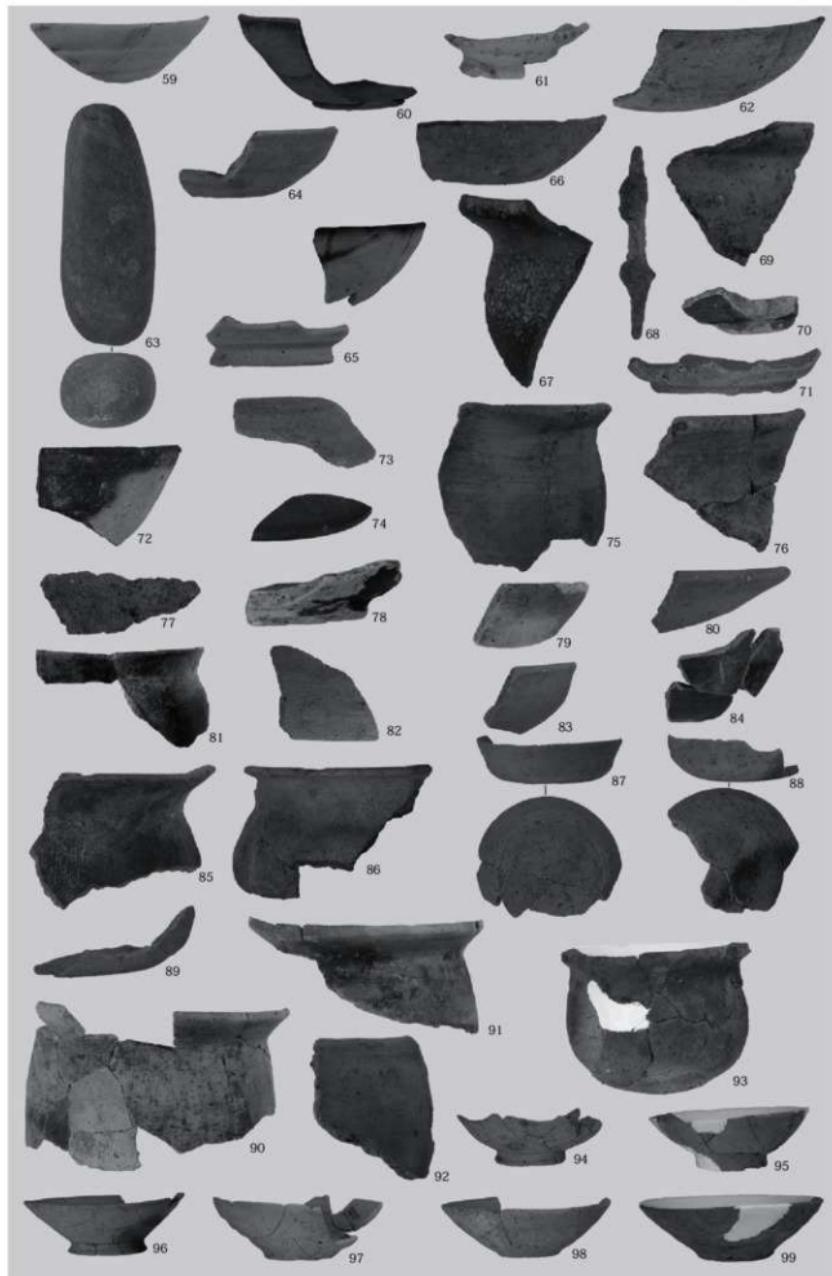


SX1土層断面(北東から)

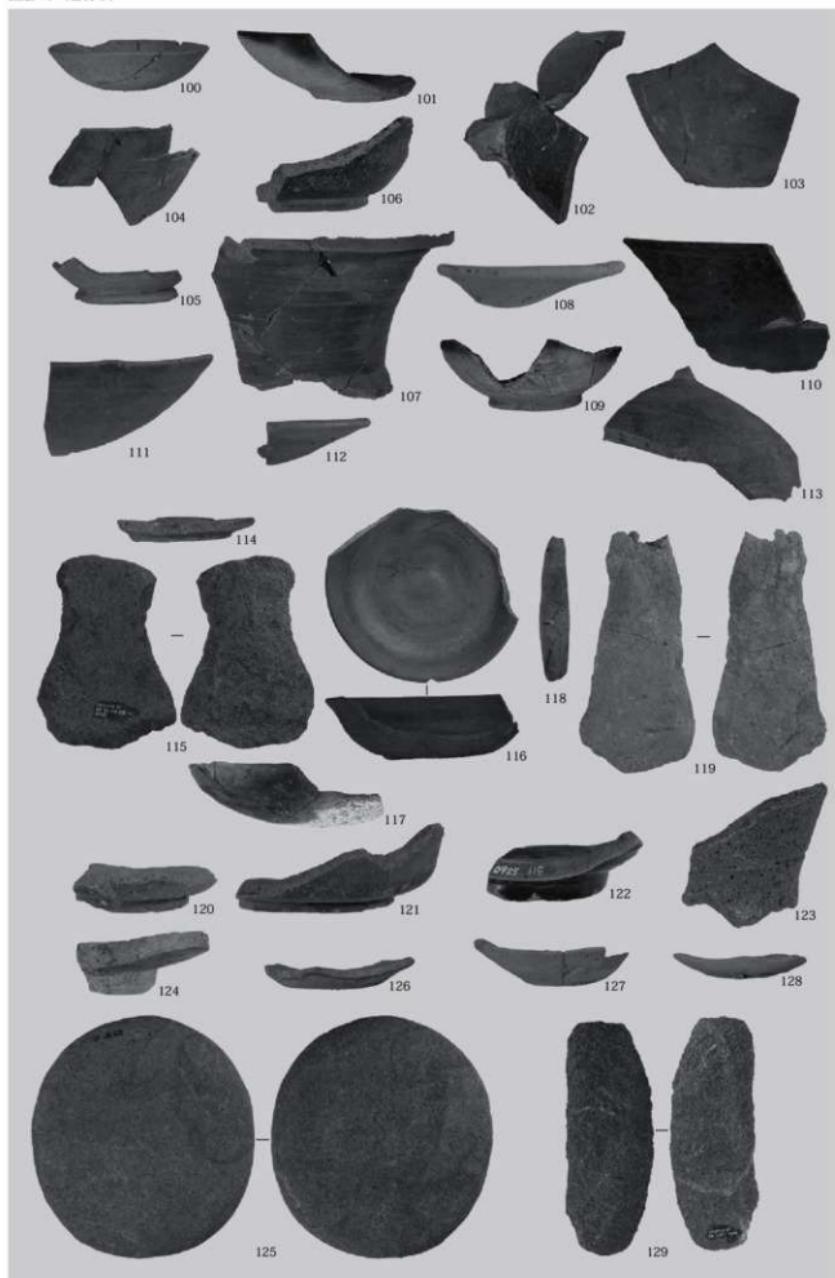
图版 14 (遗物 1)



図版 15 (遺物 2)



图版 16 (遗物 3)



## 報告書抄録

## 金沢市・野々市市 下新庄フルナワシロ遺跡

発行日 平成28（2016）年2月26日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市轟月1丁目1番地

電話 076-225-1842（文化財課）

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1236 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail mail@ishikawa-mabun.or.jp

印 刷 萬川印刷株式会社